

最上川関連遺跡確認調査報告書（1）

2008

山形県教育委員会

最上川関連遺跡確認調査報告書（1）

平成20年3月

山形県教育委員会

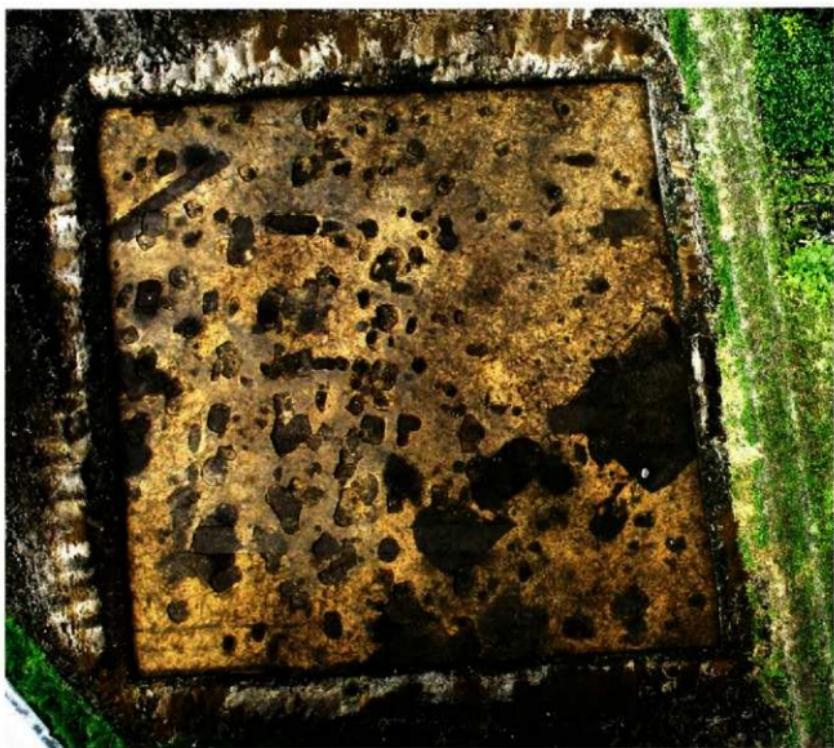




周辺空中写真（昭和 43 年撮影）



明治初年の地租改正に伴う絵図面（大石田町教育委員会蔵）



調査区全景

序

本書は、山形県教育委員会が平成19年度に実施した最上川関連遺跡確認調査の成果をまとめたものです。

山形県と関係26市町村は平成19年12月に世界遺産暫定リストへの登録にむけた提案書「最上川の文化的景観—舟運と水が育んだ農と祈り、豊饒な大地—」を文化庁に提出いたしました。そのなかでは、最上川に関連する多数の文化財が構成資産と位置づけられております。

山形県教育委員会では、最上川に関連する遺跡について調査を行なうこととし、今年度は古代の駅を中心として、分布調査などを行ないました。なかでも、内容確認のための発掘調査を行なった北村郡大石田町の駒籠楯跡では、奈良時代から平安時代の建物群を検出し、古代の駅「野後」の所在地を考える上で重要な成果をあげています。

これらの遺跡は、土の下で眠ったまま、1000年以上の時を超えて祖先から受け継がれてきたものです。私たちは、これらの貴重な文化財を未来へと伝えていく必要があります。本書がそのための普及啓発や学術研究、地域学習などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に、心からお礼申し上げます。

平成20年3月

山形県教育委員会

教育長 山口常夫

例 言

- 1 本書は平成19年度に山形県教育委員会が国庫補助を受けて実施した最上川関連遺跡の確認調査報告書である。
- 2 本書の作成は山形県教育庁教育やまた振興課文化財保護室の阿部明彦、石井浩幸、丸吉繁一の3名が担当した。
- 3 第Ⅰ章に本調査の目的および経過を、第Ⅱ章に大石田町駒籠橋跡の確認調査概要報告を、第Ⅲ章には最上川水駅関連遺跡の分布調査報告を掲載した。
- 4 採図の縮尺は不統一であり、各図にスケールを示した。遺跡位置図は市町村所有の地図及び国土地理院発行の2万5千分の1地図を、航空撮影写真（発掘調査を除く）については国土地理院発行の空中撮影写真を使用した。出典については下記のとおり。
- 5 図版の遺物は任意縮尺である。
- 6 出土遺物・調査記録類は山形県教育委員会で保管している。ただし、大石田町教育委員会で行なった調査で出土した遺物・調査記録については大石田町教育委員会で保管している。
- 7 本調査で行なった委託業務は下記のとおりである。
航空写真撮影業務 株式会社シン技術コンサル
- 8 調査にあたっては以下の方々の協力を得た。また、財団法人山形県埋蔵文化財センター 黒坂雅人氏には表採資料の調査について便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げます。
個人 星川喜美男、星川松雄、大類誠、椿井達也、須藤英之、高桑登
機関 出羽三山神社、大石田町、大石田町教育委員会、舟形町教育委員会、
新庄市教育委員会、戸沢村教育委員会、鶴岡市教育委員会、鶴岡市教育委員会羽黒分室、
酒田市教育委員会、大石田町立歴史民俗資料館 (順不同 敬称略)

報告書中に用いた国土地理院発行の地図・空中写真は以下のとおり。

- 巻頭図版2・図版1 『空中写真画像データ』尾花沢68地区2-7昭和43年7月4・5日撮影を拡大
図版13 『空中写真画像データ』尾花沢68地区1-4昭和43年7月4・5日撮影を拡大
図版15 『空中写真画像データ』酒田地区6-13昭和48年10月30日撮影を拡大
図版22 『空中写真画像データ』酒田68地区15-7昭和43年6月2日撮影を拡大
第16図・第24図 2万5000分の1地形図『舟形』より作成
第18図 2万5000分の1地形図『古口』より作成
第22図 2万5000分の1地形図『余目』より作成

目 次

I 章 調査の目的・方法および経過 1

II 章 駒籠橋跡発掘調査報告

(1) 遺跡の位置と環境	2
(2) 調査の経緯と経過	2
(3) 調査の成果	7
(4) 調査のまとめ	15
駅関連参考文献一覧	18
III 章 最上川水駅関連遺跡分布調査報告	
(1) 調査の経緯と研究の推移	30
(2) 避翼駅推定地	32
(3) 佐藤駅推定地	36
(4) 鮑海駅推定地	45
(5) 八幡原1遺跡	49
(6) 水口遺跡	53

插 図 目 次

第1図	駒籠橋跡位置図	3
第2図	大石田町教育委員会調査トレンチ平面図	4
第3図	調査区位置図	5
第4図	遺構平面図・基本層序	6
第5図	北西部遺構平面図	
	110 ピット土層断面図	8
第6図	北東部遺構平面図・218 ピット + 33 穴柱住土層断面図	9
第7図	南西部遺構平面図	10
第8図	南東部遺構平面図・105 土坑	
	148 ピット土層断面図	11
第9図	建物1平面図	12
第10図	建物2・3平面図	12
第11図	建物4・5平面図	13
第12図	駒籠橋跡遺物実測図(1)	16
第13図	駒籠橋跡遺物実測図(2)	17
第14図	駒籠橋跡珠洲焼甕実測図	29
第15図	山形県北西部古代遺跡分布図	31
第16図	ホーヤ沢遺跡位置図	33
第17図	ホーヤ沢遺跡遺物実測図	34
第18図	出舟遺跡ほか位置図	37
第19図	出舟遺跡遺物実測図(1)	39
第20図	出舟遺跡遺物実測図(2)	42
第21図	出舟遺跡遺物実測図(3)	44
第22図	飛鳥島神内遺跡位置図	46
第23図	飛鳥島神内遺跡遺物実測図	47
第24図	八幡原1遺跡位置図	49
第25図	八幡原1遺跡遺物実測図	51
第26図	水口遺跡位置図	53
第27図	水口遺跡出土遺物実測図	55

図 版 目 次

卷頭図版 1	駒籠橋跡全景	
卷頭図版 2	周辺空中写真・絵図面	
卷頭図版 3	調査区全景	
図版 1	駒籠橋跡周辺空中写真	3
図版 2	大石田町教育委員会調査写真	4
図版 3	駒籠橋跡発掘調査写真(1)	21
図版 4	駒籠橋跡発掘調査写真(2)	22
図版 5	駒籠橋跡発掘調査写真(3)	23
図版 6	駒籠橋跡発掘調査写真(4)	24
図版 7	駒籠橋跡発掘調査写真(5)	25
図版 8	駒籠橋跡発掘調査写真(6)	26
図版 9	駒籠橋跡出土遺物(1)	27
図版 10	駒籠橋跡出土遺物(2)	28
図版 11	駒籠橋跡出土遺物(3)	29
図版 12	ホーヤ沢遺跡ほか周辺	32
図版 13	ホーヤ沢遺跡周辺空中写真	33
図版 14	ホーヤ沢遺跡・荷波遺跡遺物	35
図版 15	出舟遺跡ほか周辺	36
図版 16	出舟遺跡周辺空中写真	37
図版 17	出舟遺跡遺物(1)	40
図版 18	出舟遺跡遺物(2)	41
図版 19	出舟遺跡遺物(3)	43
図版 20	出舟遺跡遺物(4)	44
図版 21	飛鳥神内遺跡周辺	45
図版 22	飛鳥神内遺跡周辺空中写真	46
図版 23	飛鳥神内遺跡遺物	48
図版 24	八幡原1遺跡周辺	50
図版 25	八幡原1遺跡遺物	52
図版 26	水口遺跡調査状況	54
図版 27	水口遺跡出土遺物(1)	56
図版 28	水口遺跡出土遺物(2)	57

I 章 調査の目的・方法および経過

調査の目的と方法

本調査は本県を代表すると考えられる遺跡について、その内容を把握するために行なったものである。平成19年12月、山形県と県内26市町村は世界遺産暫定リストへの登録をめざし、文化庁に提案書「最上川の文化的景観—舟運と水が育んだ農と祈り、豊穣な大地—」を提出した。この提案書の中では最上川に関連する多数の文化財が構成資産として位置づけられている。このような動きの中で県教育委員会は、かねてより調査の必要があった遺跡のうち、とくに最上川に関連する遺跡について調査を行ない、その内容を確認することとした。

今年度は主に大石田町・舟形町・新庄市・戸沢村・酒田市などに分布する古代の駅に関連する遺跡についての調査を行ない、あわせて鶴岡市・庄内町などにまたがる出羽三山など今後調査を進めるべき場所の事前調査なども行なった。調査は以下の方法によっている。

(1) 内容確認のための発掘調査

大石田町駒籠標跡で実施した。調査は遺構検出まで行ない、遺構の分布状況を確認して埋め戻した。

(2) 表面踏查

古代の駅推定地、出羽三山などで実施した。遺物の散布状況と遺構や地形の確認を行なった。

(3) 資料調査・市町村説明など

過去の表探遺物の調査や遺跡周辺地形図の入手などについて、土地所有者や関係市町村に便宜を図った。また、出羽三山や鳥海山では関連文献の調査なども行なった。

調査の経過

経過については下表のとおりである。平成19年9月下旬に駒籠橋跡の確認調査を行ない、その後の遺跡の跡取り及び資料調査は、開発対応の分布調査の合間に縦って実施した。

以下、II章では駒鹿振跡の確認調査の報告を、III章では古代の駅関連遺跡の調査報告を行なう。

表 最上川関連遺跡 調査経過

II章 駒籠橋跡発掘調査報告

(1) 遺跡の位置と環境

駒籠橋跡は山形県北村山郡大石田町大字駒籠に所在する。大石田町は県中央部のやや北よりに位置し、村山地域の北端付近にある。遺跡は最上川と野尻川の合流点の低位段丘上にあり、最上川の北岸、野尻川の西岸に立地している。遺跡は段丘の末端部分に築かれ、南と東側は川となっている。周辺には縄文時代と中世の遺跡が多く、駒籠北遺跡では弥生時代後期の天王山式土器の散在も確認されている。駒籠橋跡のすぐ北側にあるイカゴの上遺跡は縄文時代が主体であるが、古代の遺物も少數出土しており、駒籠橋跡との関連が注目される遺跡である。

駒籠橋跡は地元では中世城館址として知られており、遺跡名も城館址としてつけられたものである。館主は不明ながら遺跡の北側及び南側には高い土塁と深い堀が今もよく残っている。土塁の周辺では珠洲焼の壊破片なども表採されており、城館の時期を示唆している（第14図）。こうした中世城館としての性格をもつ一方で、当遺跡はその立地などから『延喜式』「諸国駅伝馬条」にいう「野後駅」の推定地ともされている（新野 1963など）。平成10年に実行なされた大石田町教育委員会による確認調査では古代の遺構・遺物を検出しており、考古学的見地から初めて当地に駅が存在する可能性を示唆した（石井ほか 1999）。

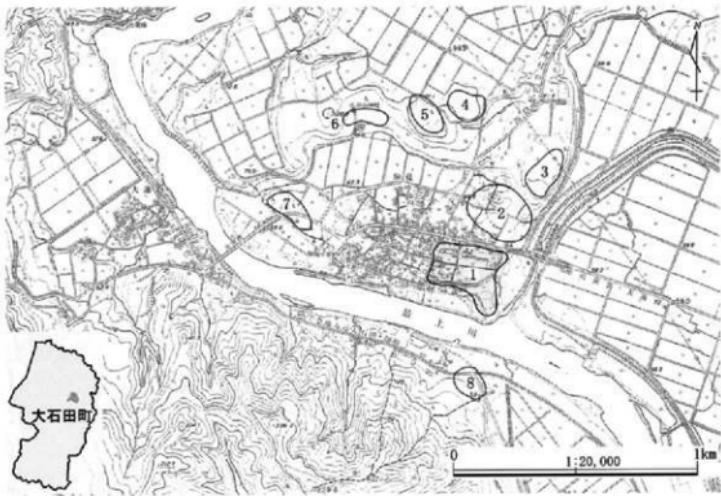
(2) 調査の経緯と経過

I章でも触れたが、平成19年、山形県は「最上川の文化的景観」を世界遺産暫定リスト候補として文化庁に提出した。提案書の中で最上川は重要な構成資産と位置づけられ、関連資産の調査などが早急の課題となっている。山形県教育委員会は最上川交通の歴史を調査する一環として平成19年度、「野後駅」の推定地である駒籠橋跡の詳細確認調査を行なうこととした。駒籠橋跡を調査対象とした理由は、前述のとおり大石田町教育委員会の確認調査により、古代の遺跡が確認されていたことが大きい。よって、以下でその概要を触れておく（第2図）。

大石田町教育委員会で行なった平成10年度の調査（以下「H10年調査」という。）では、遺跡の中心部分（土井ノ前地区）の烟地に4本のトレンチを設けている。調査では9世紀代の遺物を含む堅穴住居・柱穴などが検出された。また、遺構確認面は現地表下30cm程度と比較的浅いにもかかわらず、遺構を掘り下げた結果、良好に残存していることが判明している。

このような大石田町教育委員会の調査結果を踏まえて、今回の調査は古代の遺構が集中する土井ノ前地区を対象とした（第3図）。調査区は町教育委員会のA・B・Dトレンチを取り込む正方形に設定し、面積は東西20m×南北20mの400m²である。調査は遺構の平面プラン確認にとどめた。ただし、H10年調査のトレンチの部分では既に遺構埋土が失われているものが多いため、いくつかの遺構については底面まで掘り下げて未調査部分の遺構の土層を確認した。

調査は地権者および大石田町教育委員会の多大なる協力を得て、山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室が平成19年9月18日から9月28日までの延べ9日間行なった。調査の経過は以下のとおりである。また、9月27日に地元の駒籠地区住民を対象として現地説明会を開催した。平日にもかかわらず40名の参加を得た。

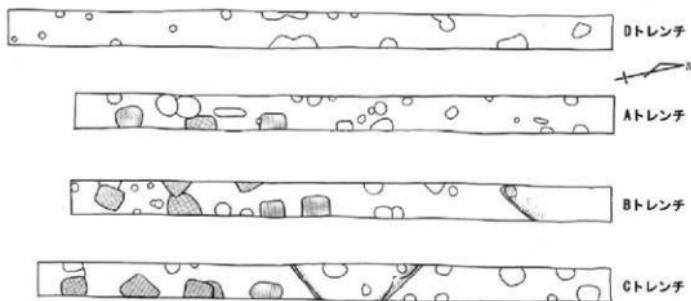


1.駒籠橋跡 2.イカゴの上遺跡 3.イカゴ東遺跡 4.駒籠B(駒籠北)遺跡
5.駒籠A遺跡 6.白山塚群 7.駒籠墳墓群 8.駒籠向遺跡

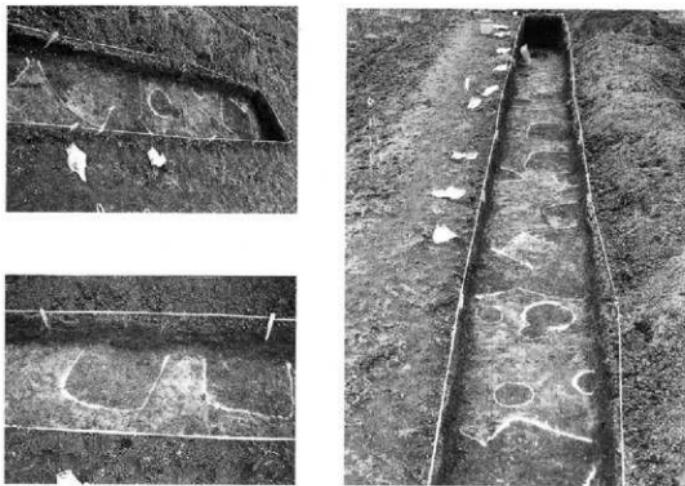
第1図 駒籠橋跡位置図(大石田町作成地図に加筆)



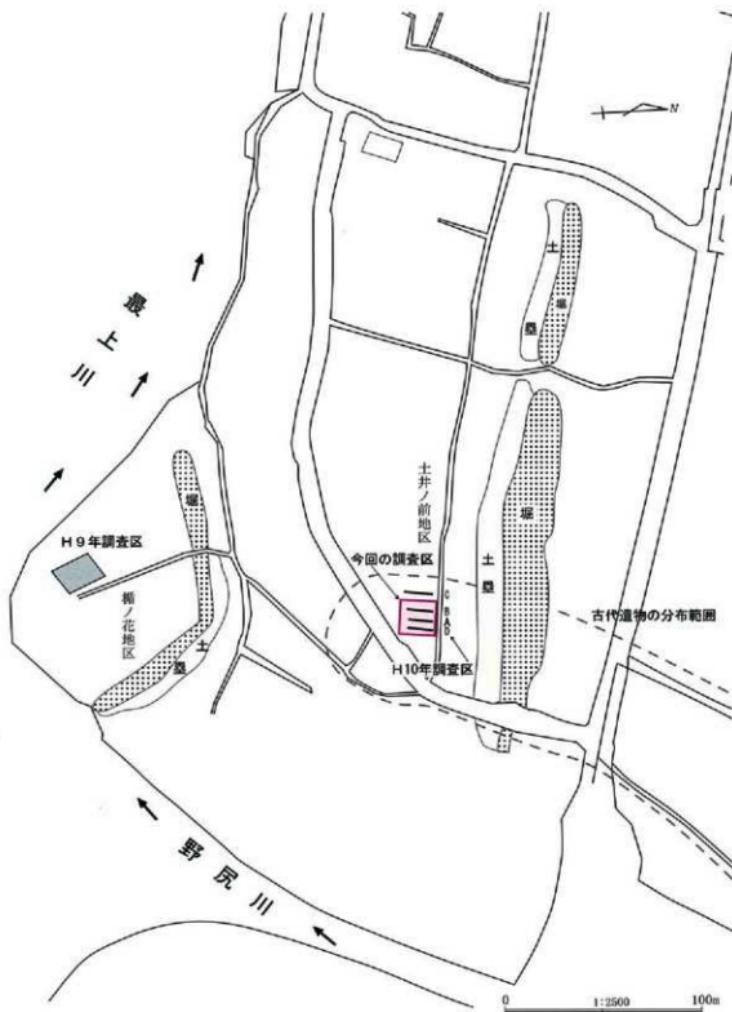
図版1 駒籠橋跡周辺空中写真(昭和43年)



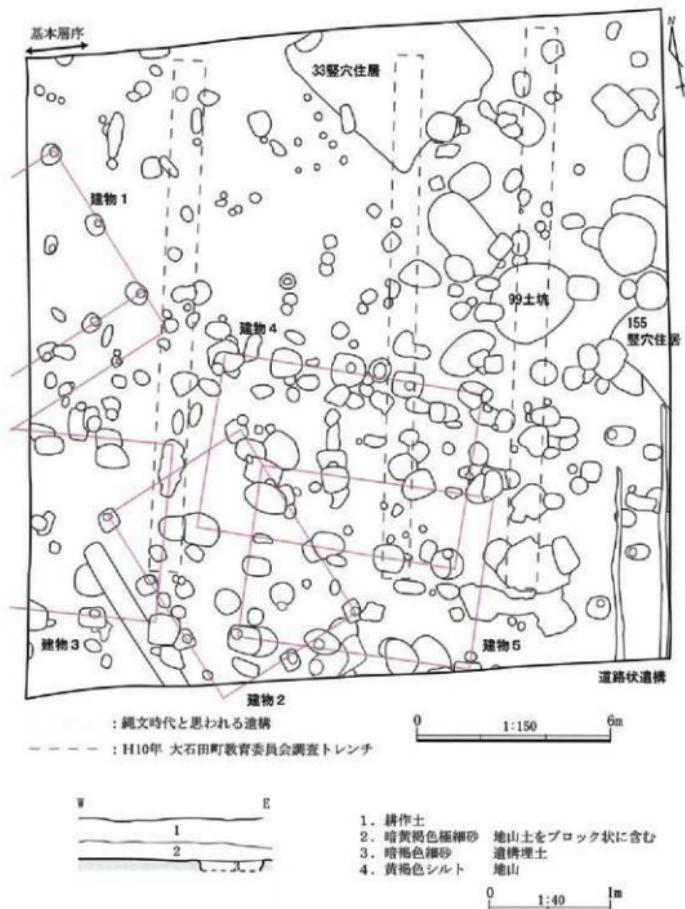
第2図 大石田町教育委員会調査トレンチ平面図
(1/150 トレンチ間の距離は任意 石井ほか1999より作成)



図版2 大石田町教育委員会調査写真(石井ほか1999より転載)



第3図 調査区位置図 (1/2500)



第4図 遺構平面図 (1/150)・基本層序 (1/40)

調査の経過

- 9月18・19日 重機による表土除去、および遺構検出。
 9月20～25日 遺構検出・精査、平板測量。
 9月26日 航空写真撮影、過去の調査トレンチの掘り下げるを行ない、土層断面図作成。
 9月27日 現地説明会の後、埋め戻しを開始。
 9月28日 埋め戻し完了後、器材を撤収して調査を終了した。

(3) 調査の成果

調査の概要

調査地は現在畑地となっており、地表から20cmまでは耕作土、その下層に遺物包含層がある。遺構は地表面から約30cm下の黄褐色シルト層で検出した（第4図）。

検出した遺構には竪穴住居、掘立柱建物、溝、柱穴、土坑、ピットなどがある。このうち土坑とピットには縄文時代のものが含まれる。なお、上述のとおりH10年調査のトレンチについては遺構を掘り下げているものが多く、埋土からの切り合い関係などは不明であるため、調査報告書（石井ほか1999）を参考にした。

遺構

竪穴住居 33住居と155住居の2棟を検出した。H10調査での「ST6」は33住居にあたる。なお、「ST18」は今回の調査の結果、土坑（99土坑）であることが判明した。

33住居は調査区の北辺で検出した。4m×5m程度の規模をもつ。主軸はN35°Wで、南東辺の東隅付近で竈および煙道を検出した。煙道は検出面で南東方向に3.5mほど延びており、良好に残存しているものとみられる。H10調査のトレンチ部を掘り下げて確認したところ、検出面から40cm下で住居貼床を確認した。貼床は10cm程度の厚さをもつ。検出面で出土した遺物にはヘラ切りの須恵器壺（第13図-3）がある。床面出土の遺物ではないが、8世紀代の住居である可能性がある。

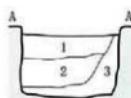
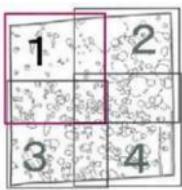
155住居は調査区の東辺で検出した。半分以上が調査区外となっており、南西辺の長さが3m以上であることはわかるが、詳細は不明である。方位は33号住居とほぼそろっており、同時期かとみられるが、検出面で出土した遺物に赤焼土器底部（図版10-8）があることから、9世紀後半の可能性もある。

掘立柱建物 建物1は調査区北西部で検出した。調査区外まで続くが、南辺に廻をもつことから東西方向が桁行とみられる。東辺は規模から考えて調査区内で完結しているとみられ、この建物は梁行2間×桁行2間以上、梁行は5.1mである。方位はN67°Eで、柱間は梁行が各2.55m、桁行が各1.8mである。

建物2は調査区南西部で検出した2間×3間の建物で、南西隅の柱穴は調査区外である。桁行6.6m、梁行4.8m、主軸はN23°Wで、建物1に直交する方位をもつことから、同時期である可能性が高い。柱間は、梁行が各2.4m、桁行が北から2.3m、2.2m、2.1mである。また、西辺の西側には近接して桁方向に平行な290溝が走っており、この建物に付随する遺構とみられる。掘り下げていないため詳細は不明であるが、廻などが設けられていた可能性がある。

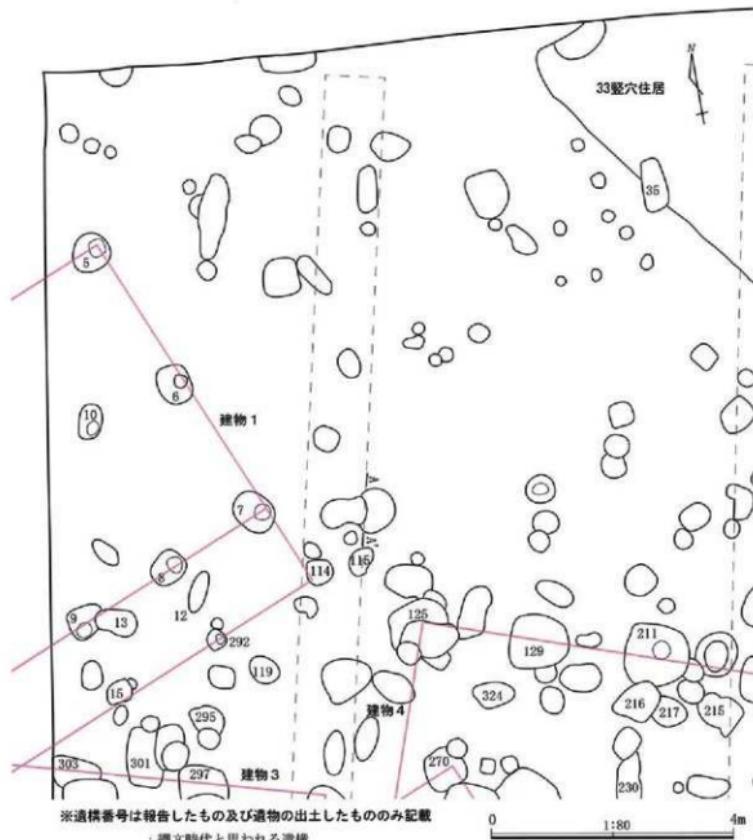
建物3～5は、1m四方程度の大型の柱穴を含む。なお、下層確認を行なっていないことや調査区の制限などもあるため、ここでは現在考えられる規模等を述べることとした。あくまでも推測であり、今後の調査により変更が生じる可能性がある。

建物3は調査区南西で検出した2間×3間以上の建物である。桁方向はN64°Wで、建物2の柱穴と290溝を切る。また、南辺の外側には小規模なピットが付随しており、建築の際の足場を組



110ピット
1. 黄褐色細砂 黄褐色シルトを含む
2. 灰褐色細砂～細砂
3. 黄褐色シルトと黒褐色細砂

0 1:40 1m

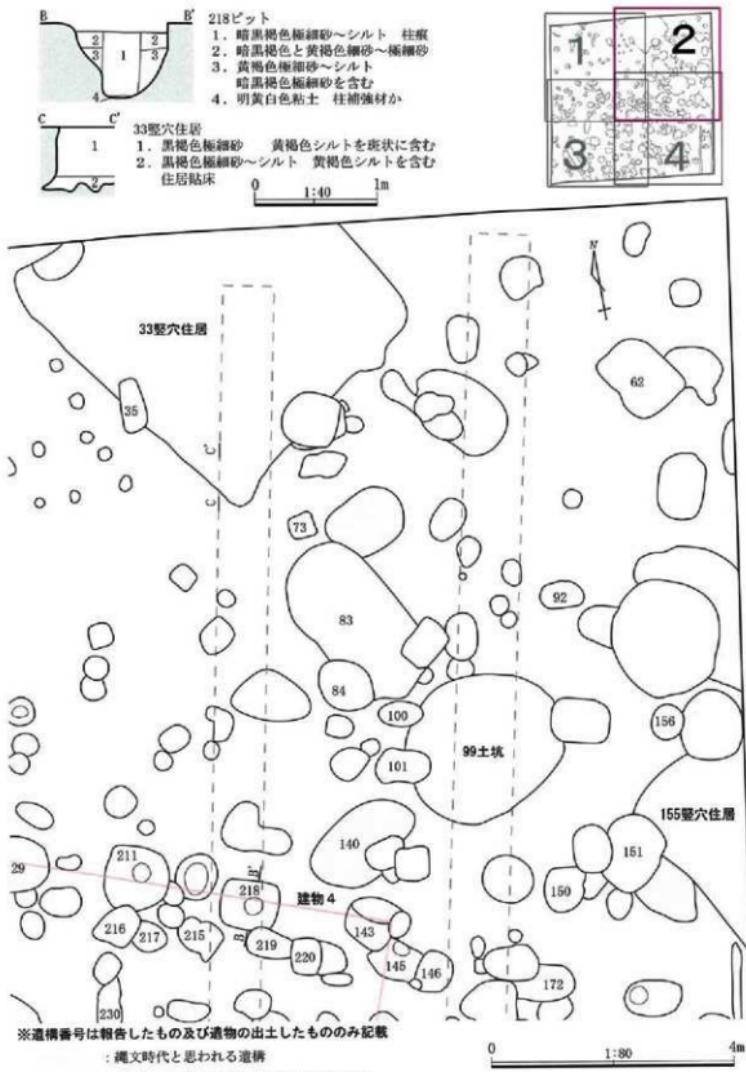


*遺構番号は報告したもの及び遺物の出土したもののみ記載

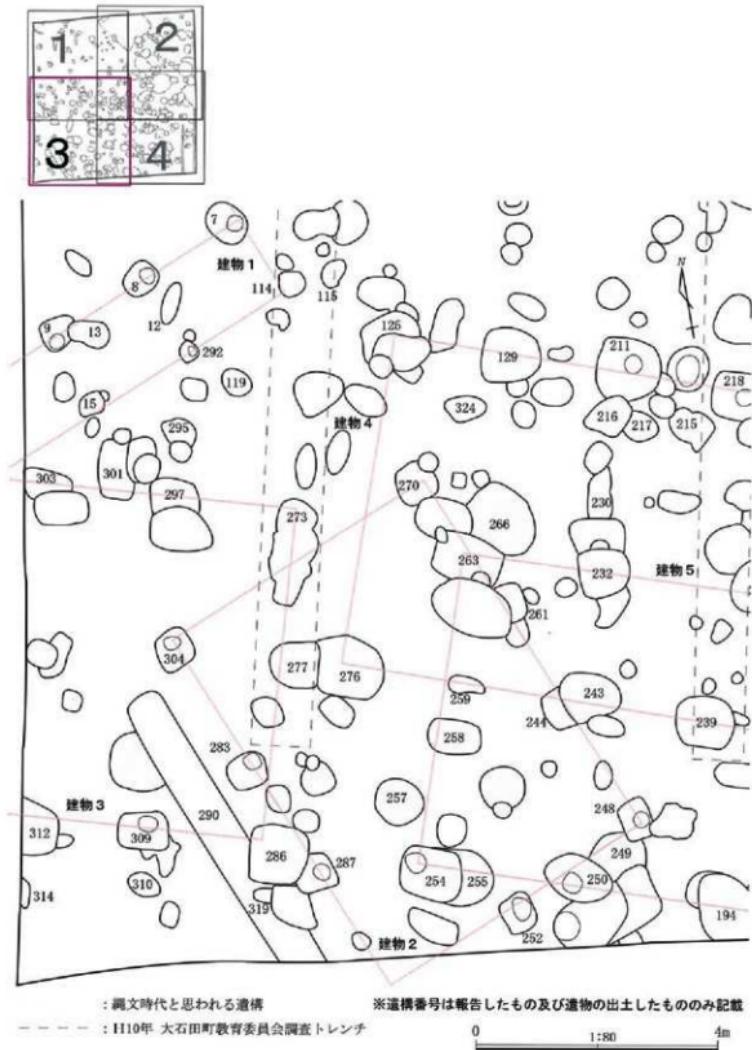
:縄文時代と思われる遺構

----- : H10年 大石田町教育委員会調査トレンチ

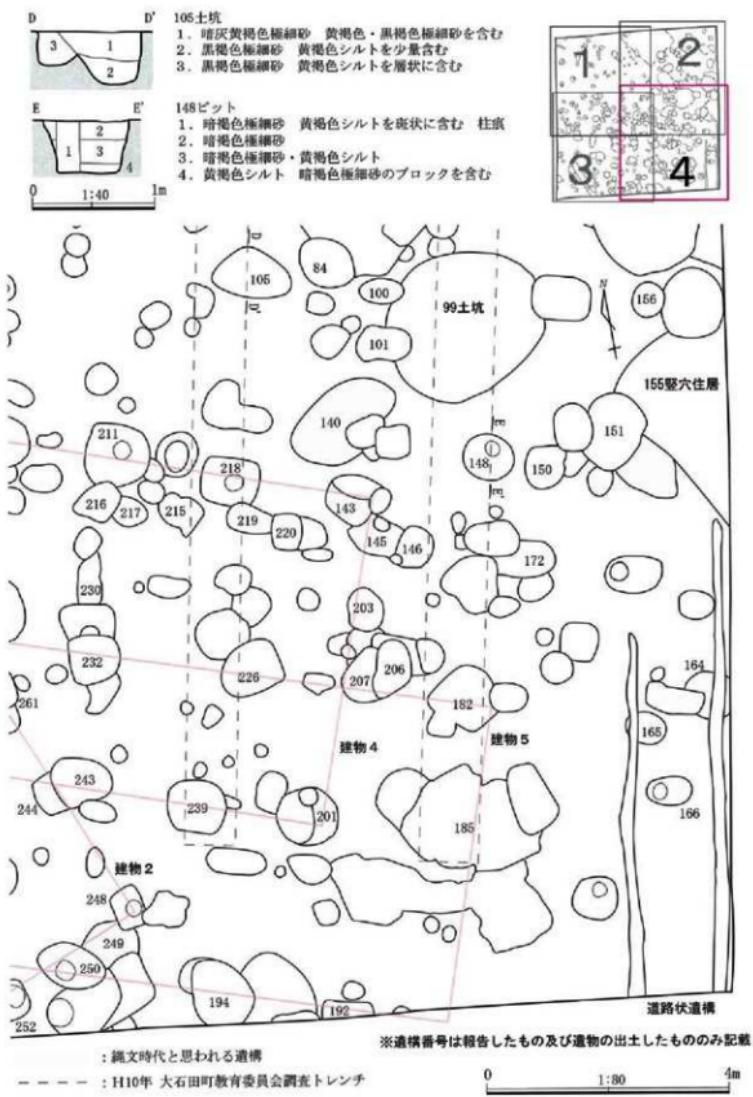
第5図 北西部遺構平面図(1/80)・110ピット土層断面図(1/40)



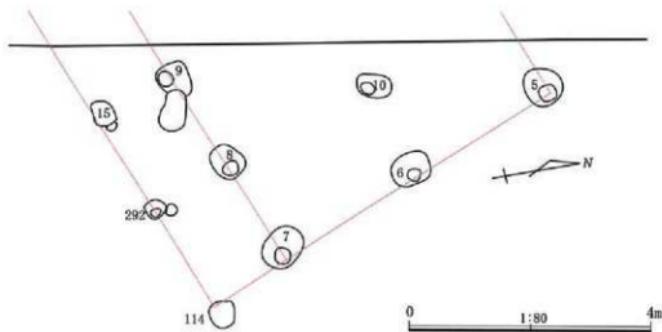
第6図 北東部遺構平面図(1/80)・218ピット・33堅穴住居土層断面図(1/40)



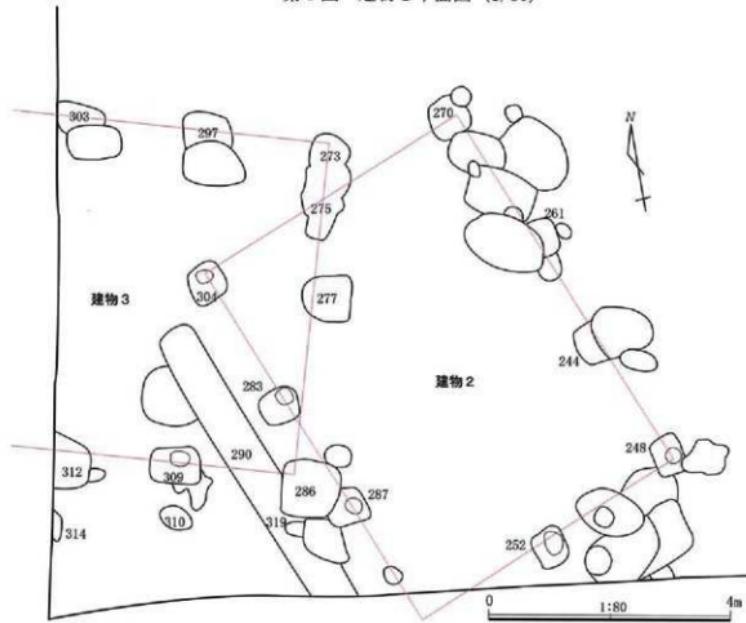
第7図 南西部遺構平面図(1/80)



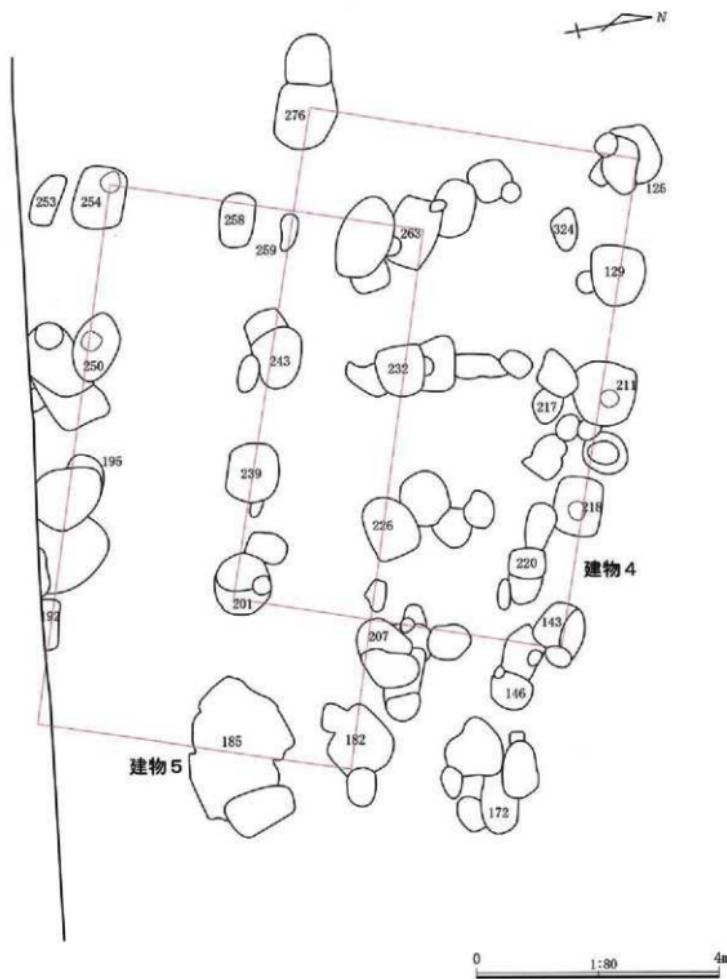
第8図 南東部遺構平面図(1/80)・105土坑・148ピット土層断面図(1/40)



第9図 建物1平面図 (1/80)



第10図 建物2・3平面図 (1/80)



第11図 建物4・5平面図 (1/80)

んだ跡かと推測される。建物4は調査区中央部で検出した。付近には柱穴や土坑などが多く、規模は定かではないが、ここでは2間×4間として組んだ。方位はN 71° Wである。建物5は調査区中央部から南部にかけての建物である。2間×4間とした。方位はN 72° Wである。

これらの建物で直接の切合があるのは、建物2→建物3と、建物4→建物5である。建物1と2は上述のように同時期と考えられ、建物3と5も柱の並びからほぼ同時期と考えられるため、順序としては建物1・2→建物4→建物3・5を想定している。なお、今回建物として組めなかった柱穴列もあることから、上述の3時期変遷にくわえ、さらに1~2時期の変遷があったものとみられる。また、竪穴住居と掘立柱建物には現状では切合がなく、新旧関係は不明である。

土坑 99 土坑は155住居の西側で検出した。H 10年調査では竪穴住居として報告されていたが、全体を検出した結果、土坑であることが判明した。検出面でも遺物が大量に含まれている状況を確認でき、赤焼土器、須恵器、土師器に加え、縄文土器や石器も多く混在している。土坑の埋没時期は9世紀後半とみられる。今回の調査区の中では最も新しい時期に所属する遺構のひとつである。

その他の遺構 調査区南東隅で狭小な溝2本が平行して南北方向へ延びる状況を確認した。方位はN 10° Eである。両溝の心々間距離は約1.5mで、検出面で既にところどころ途切れかけていることから、非常に浅い溝とみられる。遺物等も出土していないため、性格や時期ははつきりしないが、道路状遺構の可能性がある。

縄文時代の遺構 縄文時代の遺構には土坑・ピットがある。掘り下げたものはないが、古代の遺構に比べて埋土が黒っぽく、検出面からもある程度は判別できた。それらは平面図上でトーンをかけて示している。また、166ピットでは埋め甕を検出した。出土遺物には前期の大木5式から晩期までのものがある。

遺物

これまでの調査によって出土した古代の遺物について以下にその概略を記しておく。H 10年調査で出土した遺物と今回の調査によって出土した遺物は区別して各々説明する（第12図・13図1：H 10年調査、第13図2~11：県教委H 19年調査）。

H 10年調査によって出土した遺物は、第12図に示したもの他、コンテナにして5箱ほどがある。これらは、Dトレンチの中程で検出されたST18から出土したものが大半を占めており、その他のトレンチと遺構からのものは僅少という（石井ほか1999）。

須恵器では、壺、高台付壺、壺、壺などの器種があり、壺は回転糸切り無調整のものが主体（第12図1・2・5）を占めるが、少量ながら回転ヘラ切りのもの（第12図6）もみられる。壺は大形壺の破片資料（第13図1）がある。提示例は焼成の良い優品で、外面の自然釉、平行タタキ、特徴ある内面のアテ痕などが特徴としてあげられる。

赤焼土器は、壺、鉢、壺、鍋などの器種が認められ、壺類（第12図3・4）は須恵器壺の形態に類似している。鉢はクロロ整形で口縁端部が短くつまみ上げられる特徴が顕著である。壺類では長胴形態の体部に施される平行タタキやアテ具痕の特徴から見て内陸部一般のそれとは異なるものと指摘でき、むしろ庄内平野の様相に同一のものと看取される。また、同様の技法が窓える鍋の組成も上記理由による結果と考えられよう。

んだ跡かと推測される。建物4は調査区中央部で検出した。付近には柱穴や土坑などが多く、規模は定かではないが、ここでは2間×4間として組んだ。方位はN 71° Wである。建物5は調査区中央部から南部にかけての建物である。2間×4間とした。方位はN 72° Wである。

これらの建物で直接の切合があるのは、建物2→建物3と、建物4→建物5である。建物1と2は上述のように同時期と考えられ、建物3と5も柱の並びからほぼ同時期と考えられるため、順序としては建物1・2→建物4→建物3・5を想定している。なお、今回建物として組めなかった柱穴列もあることから、上述の3時期変遷にくわえ、さらに1~2時期の変遷があったものとみられる。また、堅穴住居と掘立柱建物には現状では切合がなく、新旧関係は不明である。

土坑 99 土坑は155住居の西側で検出した。H 10年調査では堅穴住居として報告されていたが、全体を検出した結果、土坑であることが判明した。検出面でも遺物が大量に含まれている状況を確認でき、赤焼土器、須恵器、土師器に加え、縄文土器や石器も多く混在している。土坑の埋没時期は9世紀後半とみられる。今回の調査区の中では最も新しい時期に所属する遺構のひとつである。その他の遺構 調査区南東隅で狭小な溝2本が平行して南北方向へ延びる状況を確認した。方位はN 10° Eである。両溝の心々間距離は約1.5mで、検出面で既にところどころ途切れかけていることから、非常に浅い溝とみられる。遺物等も出土していないため、性格や時期ははっきりしないが、道路状遺構の可能性がある。

縄文時代の遺構 縄文時代の遺構には土坑・ピットがある。掘り下げたものはないが、古代の遺構に比べて埋土が黒っぽく、検出面からもある程度は判別できた。それらは平面図上でトーンをかけて示している。また、166ピットでは埋め甕を検出した。出土遺物には前期の大木5式から晩期までのものがある。

遺物

これまでの調査によって出土した古代の遺物について以下にその概略を記しておく。H 10年調査で出土した遺物と今回の調査によって出土した遺物は区別して各々説明する（第12図・13図1：H 10年調査、第13図2～11：県教委H 19年調査）。

H 10年調査によって出土した遺物は、第12図に示したもの他、コンテナにして5箱ほどがある。これらは、Dトレンチの中程で検出されたST18から出土したものが大半を占めており、その他のトレンチと遺構からのものは僅少という（石井ほか1999）。

須恵器では、壺、高台付壺、甕、壺などの器種があり、壺は回転糸切り無調整のものが主体（第12図1・2・5）を占めるが、少量ながら回転ヘラ切りのもの（第12図6）もみられる。甕は大形壺の破片資料（第13図1）がある。提示例は焼成の良い優品で、外面の自然釉、平行タタキ、特徴ある内面のアテ痕などが特徴としてあげられる。

赤焼土器は、壺、鉢、甕、鍋などの器種が認められ、壺類（第12図3・4）は須恵器壺の形態に類似している。鉢はクロクロ整形で口縁端部が短くつまみ上げられる特徴が顕著である。甕類では長胴形態の体部に施される平行タタキやアテ具痕の特徴から見て内陸部一般のそれとは異なるものと指摘でき、むしろ庄内平野の様相に同一のものと看取される。また、同様の技法が窓える鍋の組成も上記理由による結果と考えられよう。

土師器ではロクロ使用の所謂内黒坏の類型（第12図16）とハケ目調整が特徴的な非ロクロの鉢（第12図15）や甕などを見られるが、赤焼土器の量に較べて少ない。

一方、今回の調査によって得られた資料は、遺構確認という調査上の制約から遺構直上面や検出後に確認のため掘り下げた僅かな覆土内から出土したものに限られている。出土量はコンテナにして2箱（總破片数：古代のもの87点）である。出土量の多い遺構は99土坑（1次調査ST18）38点、155住居では8点などであるが、他は3点以下と僅少である。なお、須恵器坏（第12図1）と高台付坏（第12図7）、甕（第13図11）などは1次調査資料と接合したことから、再度実測を行っている。

須恵器では坏、高台付坏、蓋、甕、壺などの器種があり、坏では底部の切離しが回転ヘラ切り（第13図3）と回転糸切り（第13図6）の二者がある。また、78ピットから出土した蓋（第13図2）は推定口径15.5cmの大形品で、胎土には細かな石英砂粒が多量に含まれている。組み合うとすれば第13図7などの高台付坏が該当しよう。壺（第13図11）は84土坑から出土したもので、体部から底部にかけての資料である。焼成良好で堅く焼き締まり、黒色で胡麻粒状の吹出しが特徴となる。整形は外面にカキ目、内面はヘラ状工具によるロクロナデが観察される。甕では体部破片と思われる焼成の良い第13図10などがある。

赤焼土器では坏や甕類の破片（第13図8・9）が認められるが、全形の窓えるものは得られていない。また、土師器も全体量が少ないため不詳な部分が多い。

以上のことから本遺跡に見る土器様相は、年代的には8世紀後葉から9世紀後葉までと捉えられるが、赤焼の長胴甕などに認められた「国府が所在した庄内平野の様相」に近似する技法と組成などの要素が注目され、遺跡の性格に関わる重要な事象と考えられる。

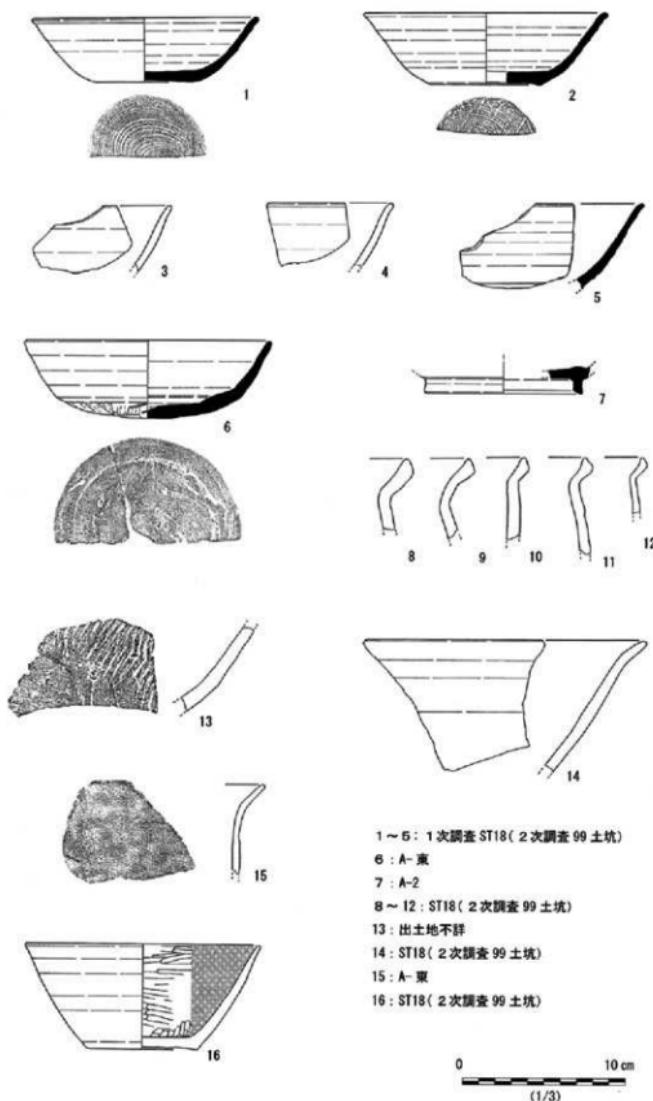
（4）調査のまとめ

調査でわかったことは以下のとおりである。

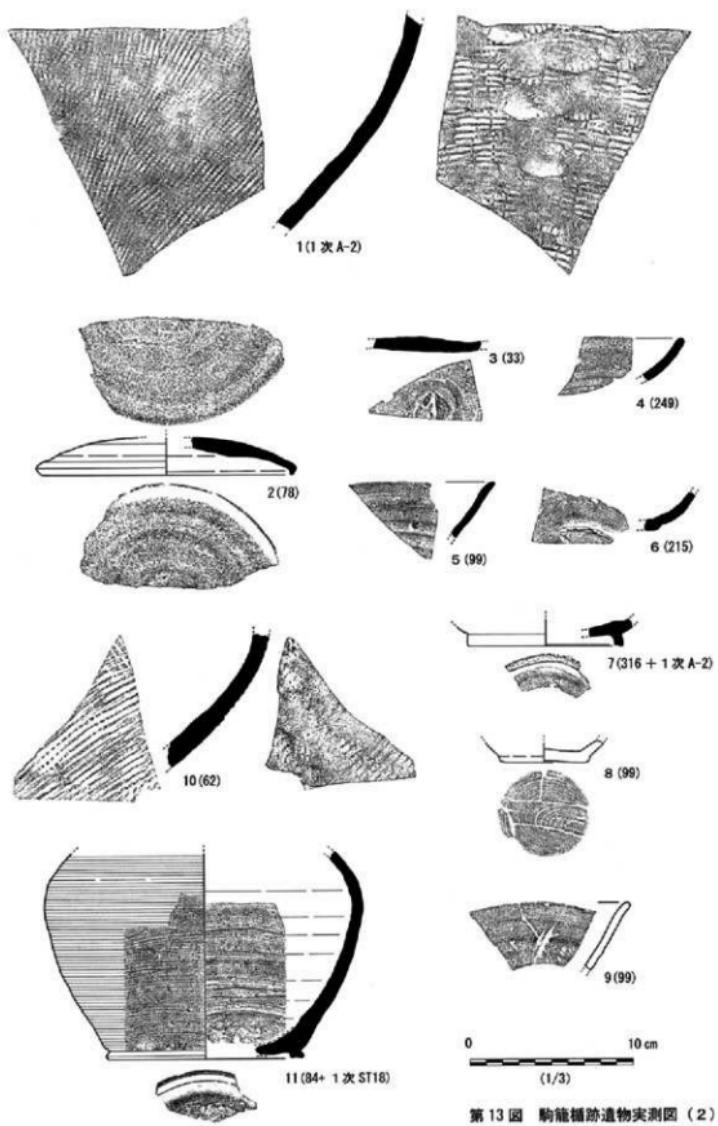
1. 遺跡は古代を中心とし、竪穴住居と掘立柱建物がみられる。
2. 遺跡の時期は8世紀後葉から9世紀の後葉であり（縄文時代を除く）、建物の切合いから考えて少なくとも3時期の変遷がある。
3. 掘立柱建物には大型の柱穴のものや、庵をもち、規格性をもって配置されているものがある。
4. 出土した赤焼土器の甕類は内陸のものではなく、庄内地域の特徴を示している。

規格性のある建物配置や大規模な柱穴などは官衙的施設の存在を推定させる。また、遺物の特徴からは、国府のあった庄内地域から土器の供給を受けていた可能性が考えられる。このようなことは、この地に「野後駅」があったとする説を補強するといえよう。

今回の調査では以上のような大きな成果を上げることができた。しかし準備不足の調査となつたことも否定できない。今後も継続して調査を行ない、今回明確にできなかつた点も含めて明らかにしていきたい。



第12図 駒籠標跡遺物実測図(1)



第13図 駒籠埴跡遺物実測図 (2)

駅関連参考文献一覧

- 阿部明彦 2004 「考古学から見た古代村山郡の成立と展開」『最上川文化研究』2
東北芸術工科大学文化研究センター
- 2007 「遊翼駅～古代山道駅から水道駅～」『山形考古』8-3 山形考古学会
- 阿部明彦・渋谷孝雄 1983 『宅田遺跡発掘調査報告書』山形県・山形県教育委員会
- 石井浩幸 2002 「古代『野後駅』擬定地の試掘調査」『北村山の歴史』4 北村山地域史研究協議会
- 石井浩幸・石井由佳 1999 『分布調査報告書(8)』大石田町教育委員会
- 大友義助 1986 「古代の交通」『鮭川村史』鮭川村史編集委員会・鮭川村
- 奥山譽男 1996 「出羽国村山郡郷名考証－徳有・梁田郷を中心に－」『地域紙研究』21
山形県地域史研究協議会
- 加藤 稔 1996 「出羽の水道駅路」『図説山形県の歴史』河出書房新社
- 兼子 崇 1993 「延喜出羽水駅の再検討」『山形大学史学論集』13
山形大学人文・教養歴史学研究室 山形史学会
- 川崎浩良 1948 「延喜式の驛次」『山形の歴史』出羽文化同窓会
- 小口雅史 1986 「最上川延喜式内水駅補考」『文經論叢』21-3 弘前大学人文学部
- 坂本太郎 1928 「水驛」『上代驛制の研究』至堂
- 1964 「水駅考」『日本古代史の基礎的研究』下 財團法人東京大学出版会(初出1962)
- 柴田謙吾 1989 「鮭川船」『最上川の船作り～山形県大石田町～』山形県教育委員会
- 須賀井新人 2001 「山田遺跡発掘調査報告書」財團法人 山形県埋蔵文化財センター
- 高桑弘美 2004 「出羽国一山形県」『日本古代道路事典』八木書店
- 永田英明 2003 「古代駅伝馬制度の研究」吉川弘文館
- 中村太一 2003 「陸奥・出羽地域における古代駅路とその変遷」『国史学』173 国史学会
- 新野直吉 1963 「令制水駅の実地研究」『日本歴史』184 日本歴史学会
- 1964 「水駅ならざる水駅」『歴史』26 東北史学会
- 1974 「律令後末期地方制度の諸問題」『日本古代地方制度の研究』吉川弘文館
- 1982 「山道と水道」『山形県史』第一巻 山形県
- 平山常太郎 1921 「出羽古駅遊翼につきて」『歴史地理』38-1 日本歴史地理学会
- 保角里志 2004 「古代最上川水駅と中世舟運への展開」『最上川文化研究』3
東北芸術工科大学文化研究センター
- 松原弘宣 1985 「水駅について」『日本古代水上交通史の研究』吉川弘文館
- 三上喜孝 2006 「古代出羽国の形成と諸段階一交流・交通の視点から」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』創刊号 山形大学大学院社会文化システム研究科・山形大学人文学部
- 嶺金太郎 1929 「王朝及鎌倉時代」『増訂最上郡史』財團法人最上郡教育会
(1972 新庄市教育委員会より復刻)
- 森田 悌 1973 「古代駅制の一考察」『日本歴史』301 日本歴史学会
1985 「古代水運に関する二、三の問題」
『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編 34 金沢大学教育学部
- 山田安彦 1978 「出羽国」『古代日本の交通路 II』大明堂
- 渡部育子 1985 「律令制下の海上交通と出羽－古代出羽における海上交通の意義をめぐって－」
『日本海地域史研究』7 日本海地域史研究会

図 版



調査区全景（南～）



調査前状況（北東～）

図版3 駒籠楯跡発掘調査写真（1）



建物4・5-2（西～）



建物1（北西～）

図版4 駒籠櫛跡発掘調査写真（2）



建物2・3（南～）



竪穴建物33（北西～）
図版5 駒籠楯跡発掘調査写真（3）



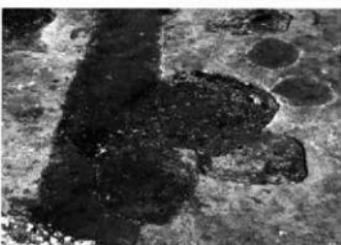
豊穴建物 33 (東～)



豊穴建物 33 烟道 (北～)



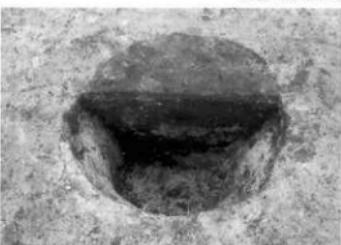
豊穴建物 33 断面 (東～)



建物 2 溝 (南～)



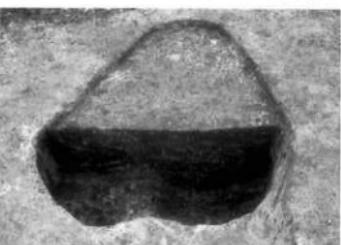
柱穴 110 断面 (西～)



柱穴 148 断面 (西～)

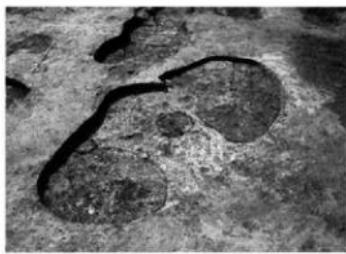


柱穴 218 断面 (西～)



柱穴 105 断面 (西～)

図版 6 駒籠櫛跡発掘調査写真 (4)



柱穴 146・145・143・142（西～）



柱穴 171・172・173・174・175（西～）



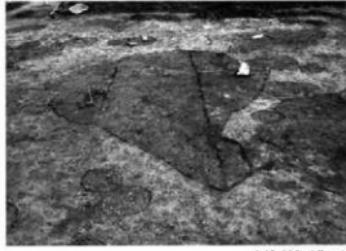
柱穴 208・206・207・209・203（西～）



柱穴 208・206・207・209・203（西～）



柱穴 260・263・266・265（西～）



土坑 992（北～）



壁穴住居 155（北東～）



建物 2・3（西～）

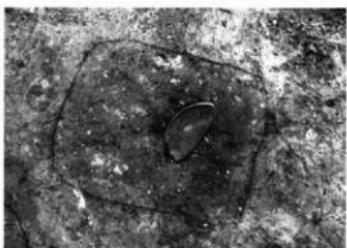
図版 7 駒籠櫓跡発掘調査写真（5）



建物溝2等（北西～）



建物4・5-1（西～）



須恵器蓋出土状況（73）

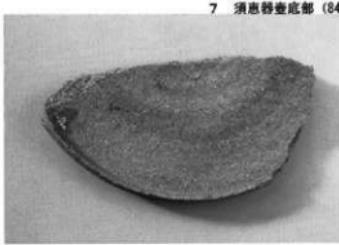
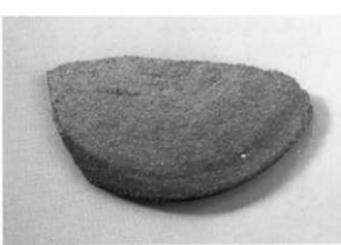
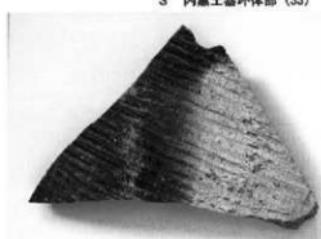
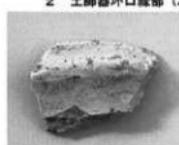
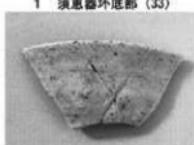
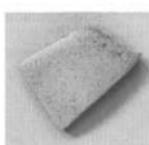
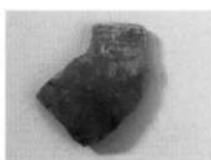
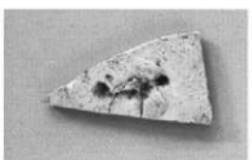
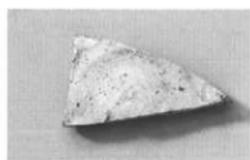


須恵器坏出土状況（215）



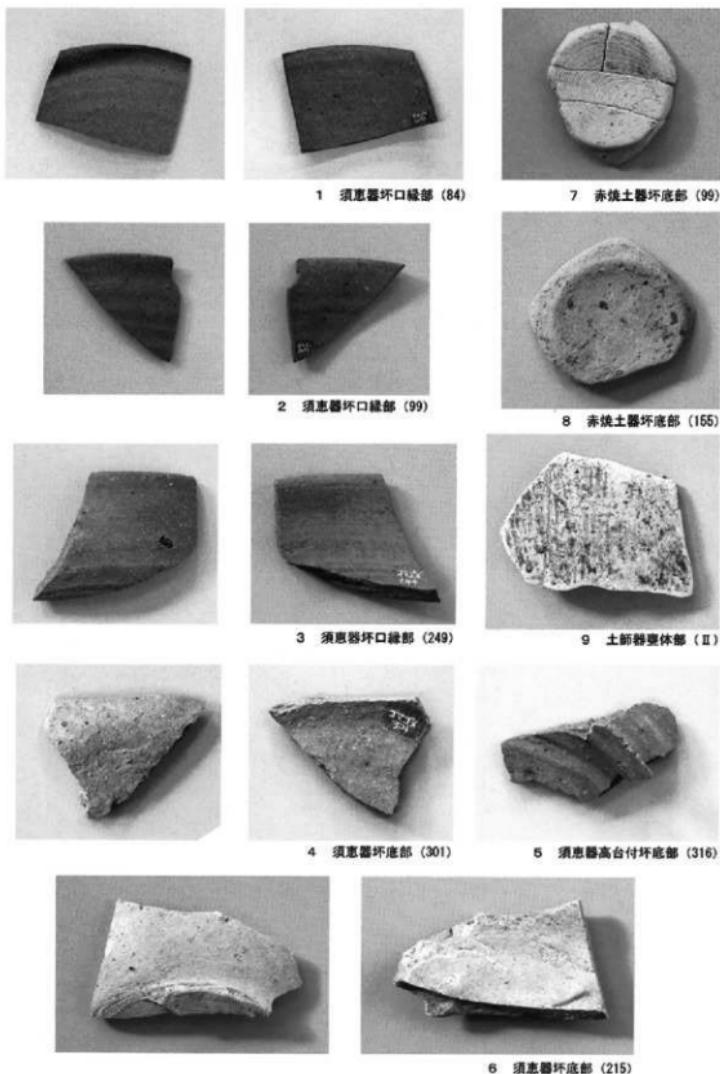
道路跡側溝検出状況（160・161）

図版8 駒籠橋跡発掘調査写真（6）

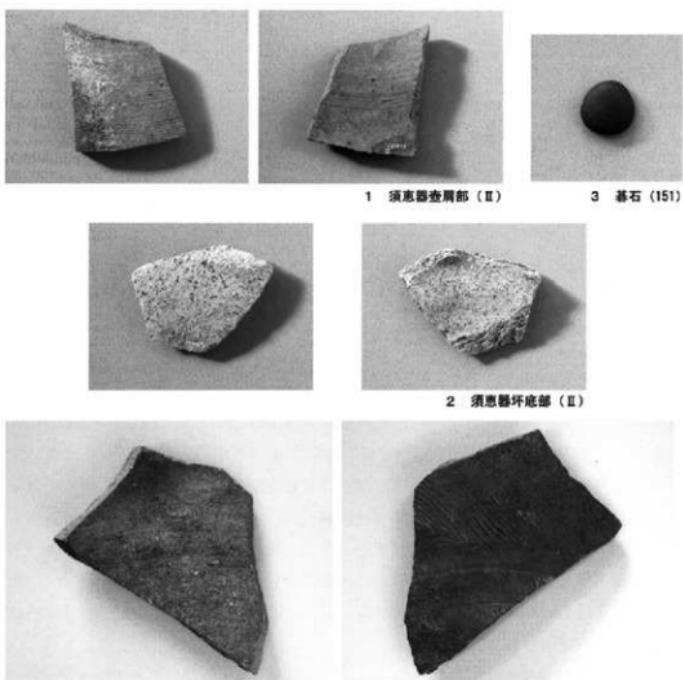


1 須恵器壺底部 (33) 2 土師器壺口縁部 (33)
3 内墨土器壺体部 (33) 4 赤焼土器壺口縁部 (33) 5 赤焼土器壺口縁部 (33)
6 須恵器壺体部 (32) 7 須恵器壺底部 (84)
8 須恵器蓋 (73)

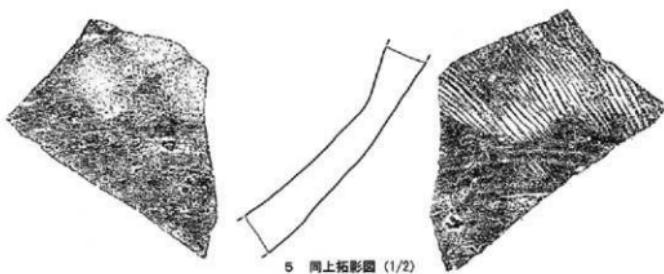
図版9 駒籠縮跡出土遺物



図版 10 駒籠橋跡出土遺物 (2)



図版 11 駒籠柄跡出土遺物（3）



第 14 図 駒籠柄跡採集珠洲系陶器要実測図

※ 本資料は昭和 57 年に北村山地区で計画された広域営農地農道整備事業（通称花笠ライン）の計画に伴って実施された分布調査によって採集されたものである。採集地点は桜ノ花地区的入口となる土橋の北側辺り。遺物はロクロ成形の甕底部と、タタキ成形の体部とが接合する部位のもので、タタキ工具の条間は細い。施良好く焼き結まり、在地産と考えられる。13 世紀頃の年代が推測される。

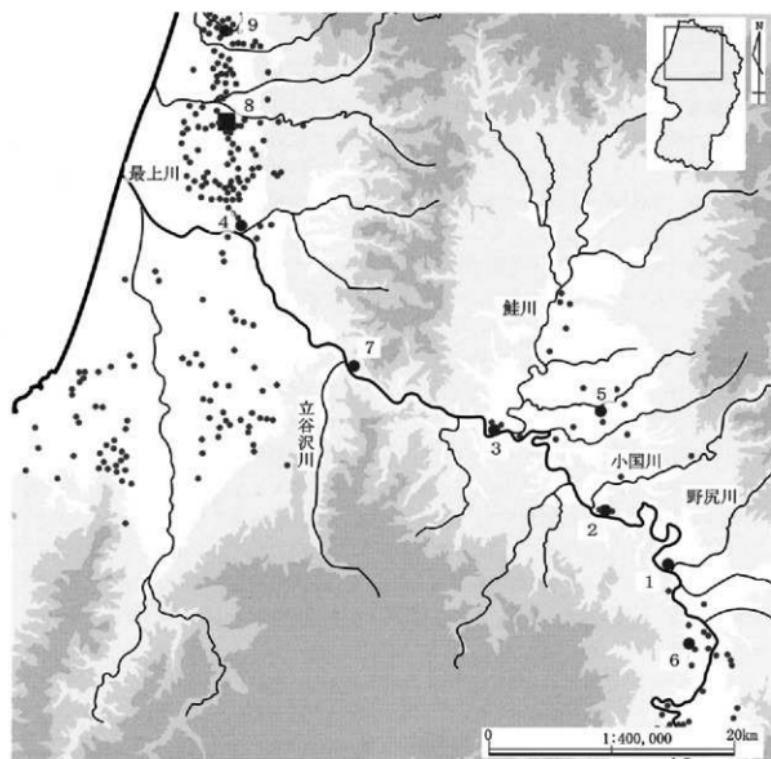
Ⅲ章 最上川水駅関連遺跡分布調査報告

(1) 調査の経緯と研究の推移

調査対象となった古代の駅家と関連遺跡については、これまで各種開発事業に伴う一般踏査や試掘調査の際に少なからず関わるところがあり、その時々の成果が部分的ながらも蓄積してきた経過がある。しかし、古代の駅あるいは水駅の解明とした立場から組織的に学術的な観点で取り組まれたことはなく、これらの遺跡の情報は他の一般的な包蔵地や集落跡としての遺跡と同様にごく限られたものであった。

このような状況の中、最上川関連資産の一つとして、特に水駅関連遺跡の探索と從来資料の集成を考古学的な立場から行って、その遺跡価値の内容を明らかにする試みは、本県の古代史解明にとっては極めて有益なことと考えられた。そのため、前章に掲げた野後駅推定地の駒鹿橋跡の発掘調査をはじめとして、主として文献史学の立場から論じられるこの多かった各水駅推定地を実地に踏査し、当該地に古代の遺跡があるか、あるいは船着き場その他の地形的環境はどうか、といった駅家として成立し得る要件の検証を行ったところである。以下に、延喜式に記載される「避翼駅」、「佐藝駅」、「飽海駅」について取り上げ、その他として最上管内では唯一の窯跡「八幡原窯跡」に関連する八幡原1遺跡、加えて野後駅の年代と当時の物流や駅家の性格論に關わる土器様相を窺う上で貴重な資料を得られた大石田町水口遺跡などを紹介する。なお、近年の研究からその所在が清川周辺に推定される水駅「白谷駅」については、最上峠の出口にある「柏谷沢」や「大川渡」などに候補地を求め、その探索を始めたところである。しかし、踏査を含めた具体的な調査の実施は今後の課題としたい。

「水駅」についての研究は、坂本太郎博士の『上代驛制の研究』（坂本 1928）を嚆矢とし、統いて実地研究を精力的に重ねられた新野直吉氏の業績（新野 1963 他）が基本となって推進されたことは論を俟たない。その成果は、『日本古代地方制度の研究』や『山形県史』に纏められ、長くその所論は通説として多くの研究者に認められてきたところである。その後、昭和 60 年代に入って森田悌氏が水駅の駅順について「白谷駅を最上川沿いに比定し佐藝の次に位置付ける」説（森田 1985）を発表し、統いて小口雅史氏もそれを補強するなどの新たな展開（小口 1986）が見られた。また、中村太一氏はこれら研究を総合した『陸奥・出羽地域における古代駅路とその変遷』（中村 2003）を著し、天武朝～和銅元年を I 期、X 期を延喜式期（9世紀後半～10世紀初）とする I 期～X 期に渡る各期の路線変遷を詳細に整理された。本書はこの成果に負う所が大きく「佐藝駅の設置時期」、「避翼駅が分岐点としての性格を帯びること」、「宝龜 11 年（780）の若麻呂の乱により從來の山道駅路が危機に瀕し、その結果出羽への入国路が付け替えられて延喜式記載路線の原型が形成されること」、「出羽国府の遷移により白谷駅・飽海駅が設置されること」等々の指摘は調査の中での大きなヒントとなった。また、何よりこうした先行研究に考古学的な実証成果を僅かと謂えども加えることができたことは大きな意義があったと強調したい。



1. 駒籠跡 2. ホーヤ1遺跡 3. 出舟遺跡 4. 飛鳥神内遺跡 5. 八幡原1遺跡 6. 水口遺跡
7. 白谷駅推定地 8. 城輪跡 9. 宅田遺跡

第15図 山形県北部古代遺跡分布図

III章 引用参考文献

- 小口雅史1988「最上川延喜式内水駅補考」『文經論叢』21-3弘前大学人文学部
坂本太郎1928「水驛」『上代驛制の研究』至文堂
中村太一2003「陸奥・出羽地域における古代駅路とその変遷」『国史学』173国史学会
新野直吉1963「令制水駅の実地研究」『日本歴史』184日本歴史学会
新野直吉1974『日本古代地方制度の研究』吉川弘文館
新野直吉1982「山道と水道」『山形県史』第一巻 山形県
森田 勝1985「古代水運に関する二、三の問題」
『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編34金沢大学教育学部

(2) 遺跡推定地（ホーヤ沢遺跡）

所在地 山形県最上郡舟形町大字富田字ホーヤ沢

遺跡環境 根渡集落の北東 250 m に位置し、遺跡周辺で北に向ける「ホーヤ沢」が形成した段丘面を占地する。標高は 58 m 内外で北側の水田面との比高が 10 m ほどとなる平坦な高台となっている。地目は畑地である。規模は遺物の分布範囲と地形から東西 100 ~ 150 m、南北 300 m ほどの台地一帯と推測され比較的規模の大きな集落跡の存在が考えられる。

遺物分布 奈良～平安時代の土器類が採集できるが、その集中地点は太郎野集落へ抜ける県道が東へと大きく折れるあたりから南西側の畑地一帯と窺える。ここで提示できた大方の資料はこの周辺から採集されたものである。

採集遺物（第 17 図） 遺物は、土師器、赤焼土器、須恵器などが得られているが、量的には須恵器が目立っている。須恵器では、壺、壺、壺、甕等の器種が認められ、いずれも平安初期のものが主体と考えられる。壺（1～3）は、回転籠切り無調整のものであり、破片資料の推計から、底径が 7.0 ~ 7.5 cm で、口縁部はさほど引出されずに外傾気味に立てる類型と判断される。1・3 は灰色でやや硬い焼き締りがあり、2 は軟質の灰色で、砂粒などが目立たない滑らかな器面を有している。4 は中型壺の口縁部片で、灰白色を呈し内外面共にロクロ痕が確認できる。5 は中型甕の頸部から肩部にかけての資料で、外面に平行タタキ目、内面にナデによる整形痕が見られる。色調は暗赤褐色で硬く焼き締り、胎土混和材としての石英粒がやや多い。6 は長頸瓶と思われる壺の肩部片で、硬い焼き締りや多



ホーヤ沢遺跡遺跡近景 (南西～)



ホーヤ沢遺跡遺跡より根渡遺跡を望む (南東～)



左岸のホーヤ沢遺跡とホーヤ沢 (北西～)



ホーヤ沢遺跡遺跡より荷渡遺跡を望む (東～)

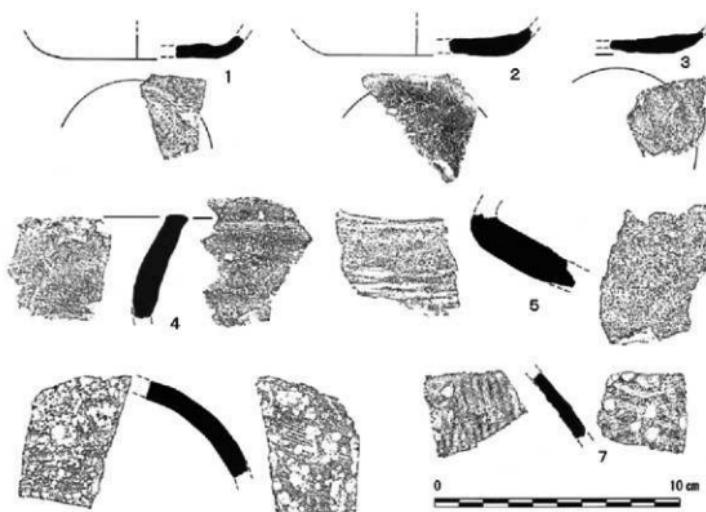
図版 12 ホーヤ沢遺跡ほか周辺



第16図 ホ一沢遺跡位置図



図版13 ホ一沢遺跡周辺空中写真

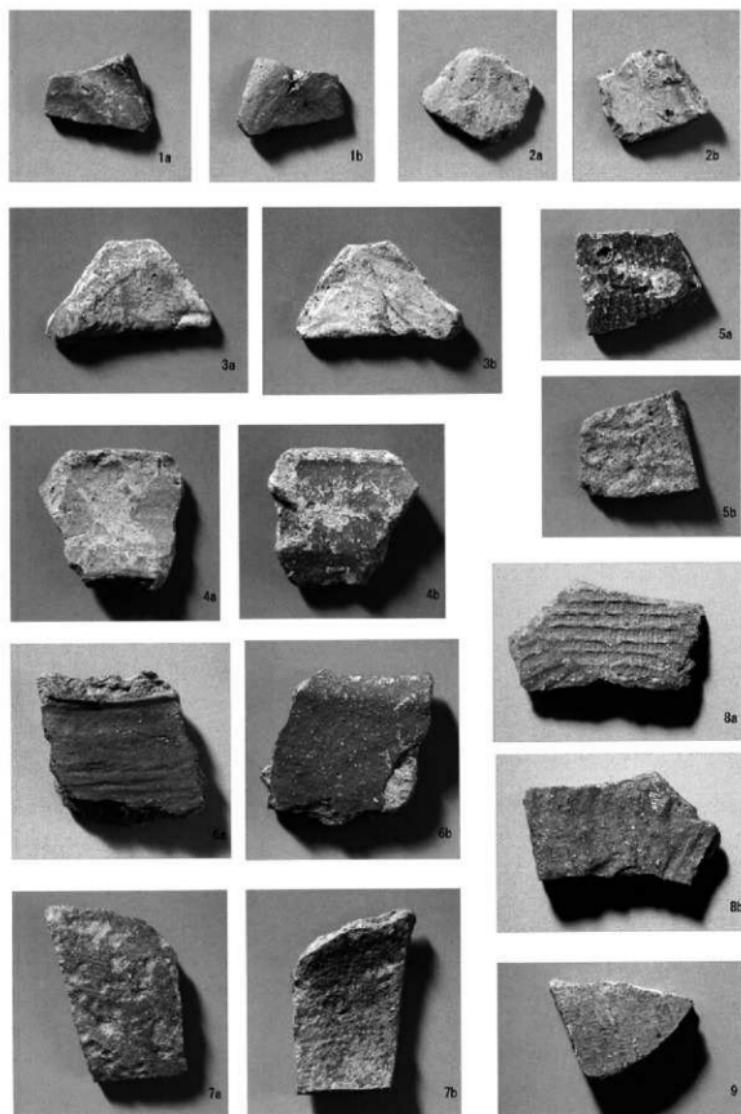


第17図 ホーヤ沢遺跡遺物実測図

めに混入された石英粒などが特徴的に窺える。7は中型甕の体部片で、外面に平行タタキ、内面には同心円紋のアテ痕が見られるほか、外面に薄く付着する暗緑色の自然釉が認められる。色調は青灰色で、硬く焼き締まった甕であったと推察される。

遺物の年代 須恵器壺類ではその底部切離しが回転鋸切り無調整のものが主体的で、九世紀中葉以降に盛行する回転糸切りのものを今のところ認めていない。また、須恵器壺類の底径は7.0～7.5cmと推計され、山形盆地の窯跡資料に照らすと久保手1号窯や小松原1号窯、庄内では山橋5SQ 1窯跡や鶴瀬山1号窯出土例に近いことが理解できる。これら窯跡の年代は、概ね9世紀第1四半期に中心を置く遺物群と捉えられるものであり、本遺跡から得られた須恵器群の年代的一点もこの頃に位置付けて大過ないと判断される。

所 見 避翼駅は、『統日本紀』天平宝字3年（759）九月二十六日の勅に「始めて出羽国雄勝・平鹿二郡と玉野・避翼・平戈・横河・助河、ならびに陸奥国嶺基等の駅家を置く」として現われる古代の駅家名である。避翼駅の推定地は舟形町富田や長者原あるいは福寿野、馬形や鳥川向、根渡の北西に所在した轟橋跡地内とする説が先学により唱えられて来ているが、未だ確定的なものは見当たらない。こうした中、考古学的な調査を通してこの地区に当該期の遺跡が確認できた意義は大きいと考えられる。なお、今回把握できた遺跡地点の性格究明は今後の課題となるが、採集品の須恵器には奈良時代に遡ると捉えられるものもあり、当初に設置された「山道陸路としての避翼駅家」を考える上で注目される。また、前駅「野後」との陸路を辿る上でも大きな手懸かりを与えてくれたと評価できよう。



1~7:ホ一ヤ沢遺跡 8・9:荷渡遺跡

図版 14 ホ一ヤ沢遺跡・荷渡遺跡遺物

(3) 佐藤駅推定地（出舟遺跡）

所在地 山形県最上郡戸沢村大字藏岡字出舟

遺跡環境 出舟集落の東200mの最上川右岸段丘上に位置し、南側前面は最上川と接する急崖となっている。標高43m内外、南接して西流する最上川との比高は約15m、一帯は最上川によって形成された中位の河岸段丘面で平坦な高台である。遺跡規模は古代遺物の分布範囲から東西100~150m、南北50~100mほどの拡がりと推測できるが、これを包括して縄文中期を主体とする大規模な集落遺跡がその周囲を取り巻いている。

遺物分布 奈良~平安時代の土器類が採集できる地点は、最上川に沿う旧道と新たに整備された直線的な農道に挟まれた畑地内にあり、その拡がりはさほどでもない見受けられる。以下に示す大方の土器類はこの地点から得られたものが殆どであるが、過去の採集記録からは、北に隣接する戸沢中学校のグラウンド東側畑地にも本遺跡と同様の古代遺物の散布地が確認される（黒坂雅人氏採集資料）。

採集遺物 遺物は、土師器、赤焼土器、須恵器などが得られているが、量的には須恵器が多い。須恵器では、壺、高台付壺、蓋、壺、甕等の器種が認められ、壺（第19図1~6）や高台付壺（第19図7、第20図）では共に、回転ヘラ切り無調整の一群（第19図1~4、第20図）と回転糸切り無調整のもの（第19図7）とが認められる。なお、ヘラ切り無調整壺の底径は、破片資料の復元実測から底径が7.0~10.5cmと窓われ、一部は奈良時代後半まで遡る可能性が考えられる。一方、糸切りの第19図7などは、小さめの底部か



出舟遺跡から最上川を望む（北西～）



出舟遺跡北側近景（南東～）

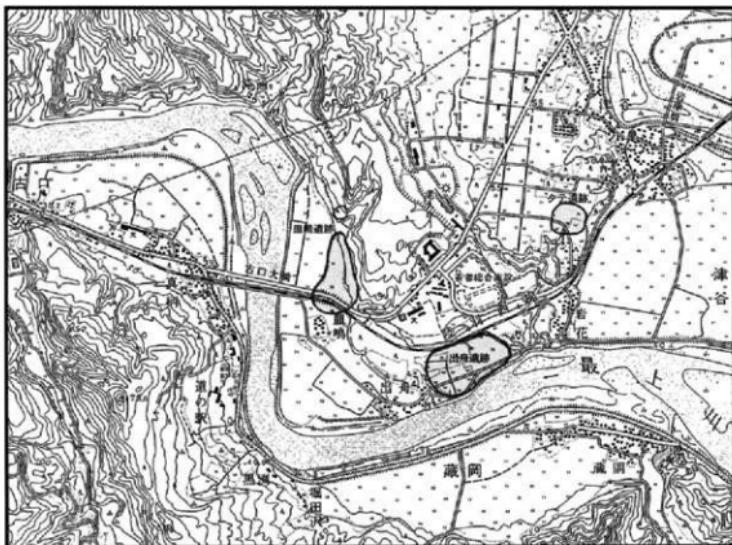


出舟遺跡須恵器散布地（南東～）



出舟遺跡近景（東～）

図版15 出舟遺跡ほか周辺



第18図 出船遺跡ほか位置図



図版16 出船遺跡周辺空中写真

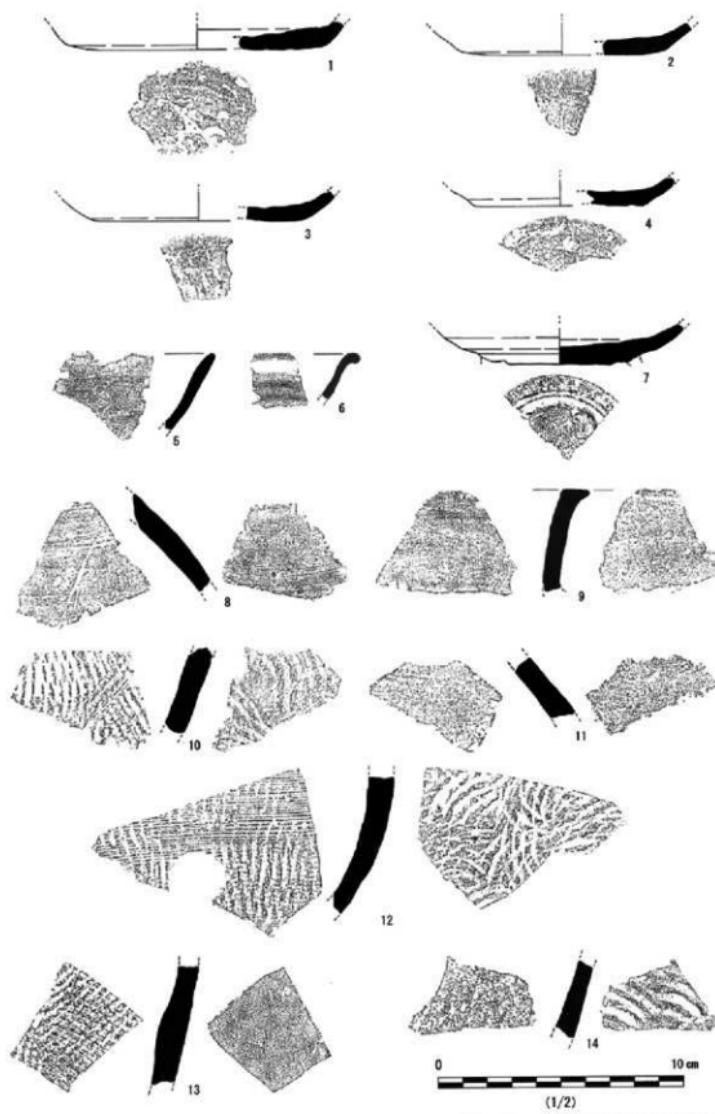
ら椀形の丸みを持って立ち上がる体部形態が想像され、九世紀中葉代の年代が与えられる。また、口縁部のみの資料でも同様の様相が見受けられ、器壁のやや厚い第19図5はヘラ切りの類型に、器壁が薄く、口唇が強く外反する第19図6はより新しい糸切りの無台杯との関連が考えられる。

蓋では図示できるまでのものが得られてないが、図版17の2などは、糸切りの高台付杯に伴う類型と考えられる。一方、壺類では、短頸壺の口縁部（第19図9）や、長頸壺と思われる頸部資料（第20図5）などがあり、器種構成に於いては当時の一般的な在り方に遜色がない。壺では、器壁の厚さや、タタキ当て痕などの様相から大中小の器種が推測でき、ここでも整った在り方と言えそうである。その他の器種では、量的に少ないながら、赤焼土器の杯（図版18の8）や鉢（図版20の4）、土師器の壺類などの破片資料も認められるが、詳しく述べるまでの内容がないことからここでは割愛する。

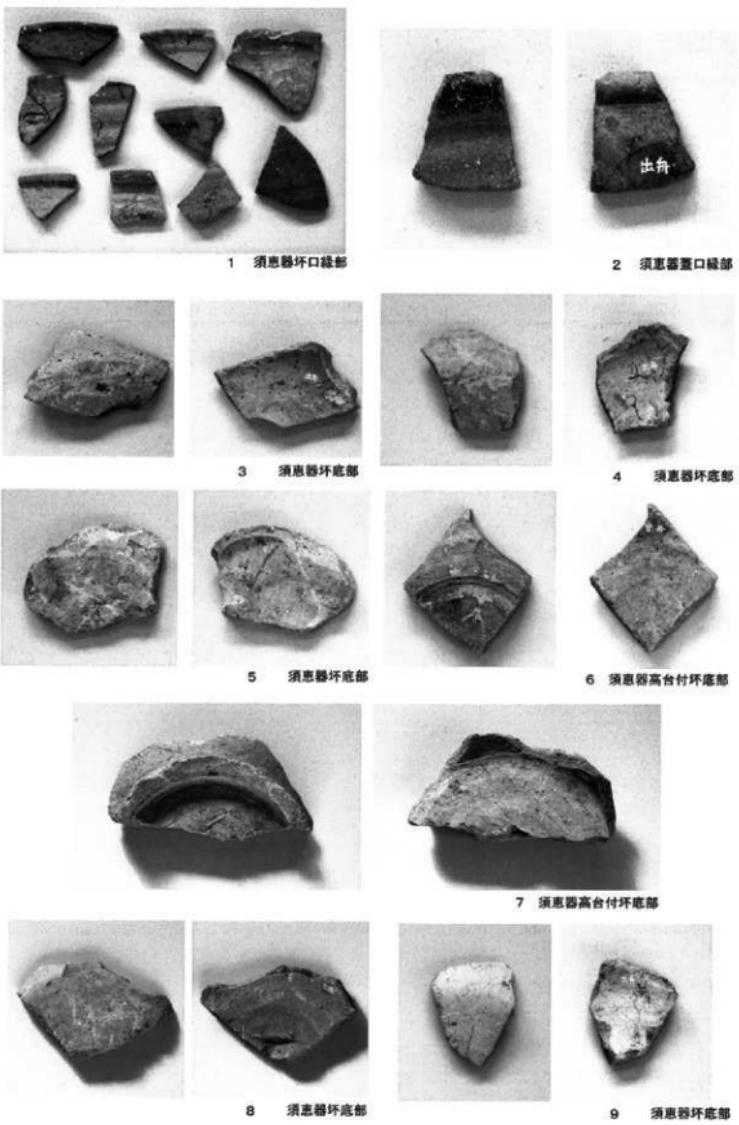
遺物の年代 以上で観たように、採集遺物にはヘラ切り杯などの様相から八世紀後葉まで遡る一群と、後に述べる新庄市八幡原1号跡や八幡原窯跡出土須恵器との関連が窺われる九世紀中～後葉代の一群とが識別でき、前者は庄内東部丘陵窯跡群の泉谷地1号や順瀬山1号窯、あるいは山楯5号跡S1号窯跡などから供給された可能性が考えられる。しかし、手元の資料は限られており、個別的な論証は今後に残された課題としたい。このように、我々が得た数少ない資料からは、後項の所見で述べる中村氏の見解に近い考古学的成果が得られたこととなり、本遺跡が天平宝字三年（759）に設置された避翼駅とほぼ同じ頃に設置された「佐藝駅」関連の遺跡である可能性が俄然高まったと言えそうである。

所 見 佐藝駅は天平宝字三年（759）に設けられた避翼駅との関連から、その頃には設置されたと考えられる。すなわち、当時の出羽国府と内陸の玉野駅（元の大室駅）を結ぶ中継地として、天平九年（737）頃に出羽側が整備して既に完成していた駅路の途上に新たに設けられた駅家と位置付けられる（中村2003）。これに従えば、考古学的遺物の年代は八世紀第3四半期から同第4四半期が上限となり以降の「延喜式」に記載される水駅として機能していた時代、すなわち九世紀から十世紀前半代のものが主体と推測される。

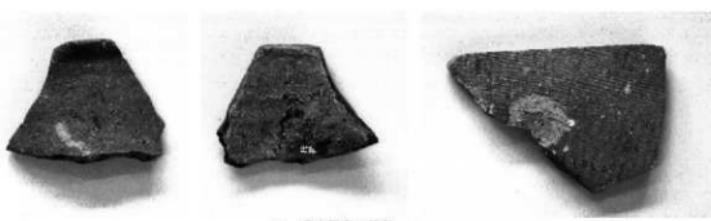
佐藝駅に関する従来の研究は新野（1963、1964、1982）や兼子（1993）、あるいは保角（2005）等による一連のものがあり、鮭川を遡った真木新田や向名高、あるいは合流点の岩鼻などの擬定地がその候補として上げられている。この度の調査でも、「鮭川と最上川との合流点付近、且つ次駅と陸行の便が計れる最上川・鮭川の右岸側に確認できる古代遺跡」との観点からこの遺跡に着目した経緯がある。また、今回の調査により付近の皿嶋遺跡や岩鼻と津谷の中間にあるタテ遺跡からも須恵器等の遺物を採集しており、この地域一帯に舟出遺跡を中核とした古代集落の展開が確認できた。なお、舟出遺跡と船着き場との関係であるが、岩鼻集落の西側と舟出遺跡の東辺の間に二本の沢筋が入り込み、台地が大きく開析されて最上川本流とつながっている場所が注目される。今もその辺りは内湾状の入り江様となる地形を留めており、やや狭隘ながら船着き場を設けて駅船十隻程度を繫留できる舟泊まりとするには充分な要件を備えていたと考えられよう。



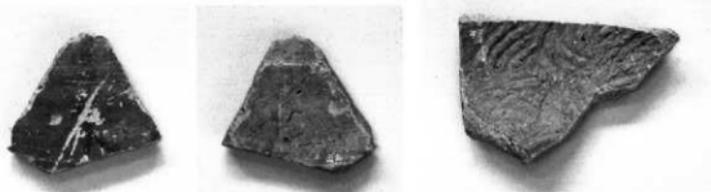
第19図 出船遺跡遺物実測図（1）



图版 17 出船遗物 (1)



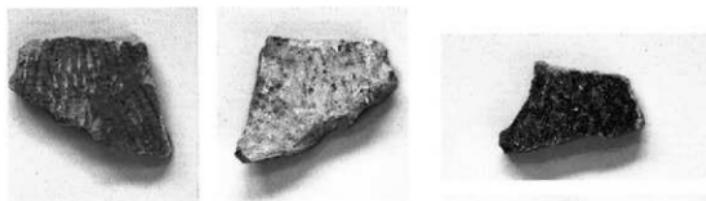
1 須恵器壺口縁部



2 須恵器壺肩部



4 須恵器壺体部



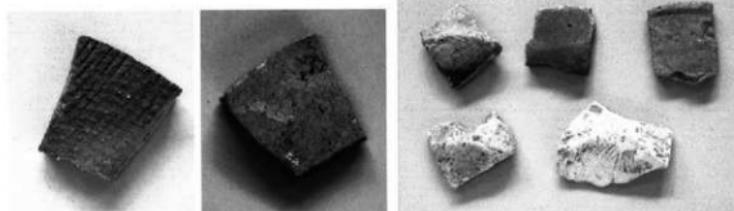
3 須恵器壺口縁部



5 須恵器壺体部



6 須恵器壺体部

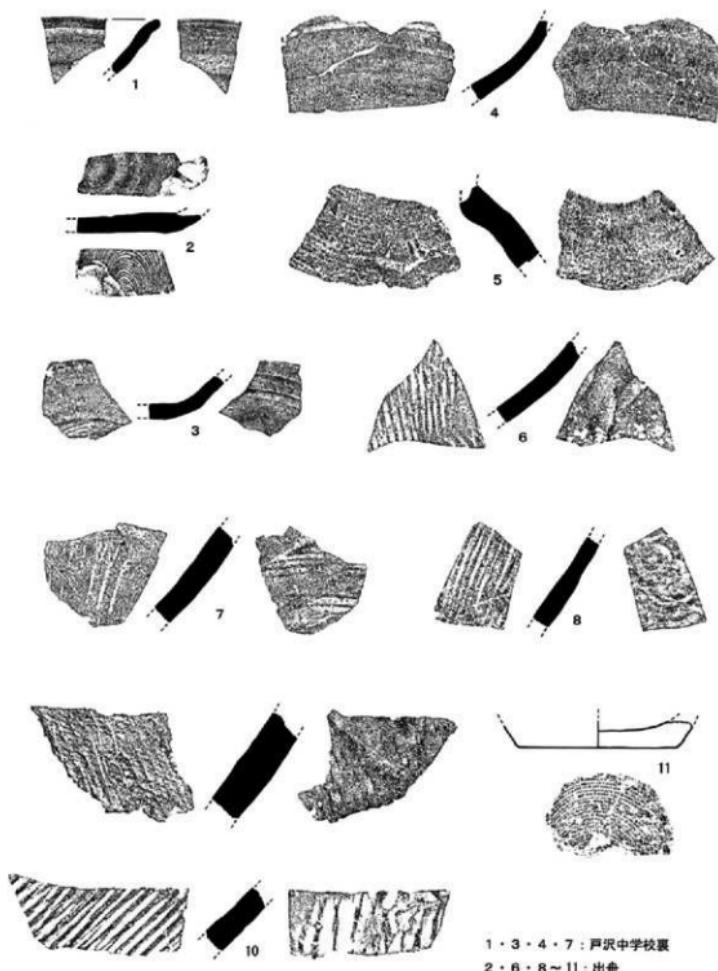


7 須恵器壺体部

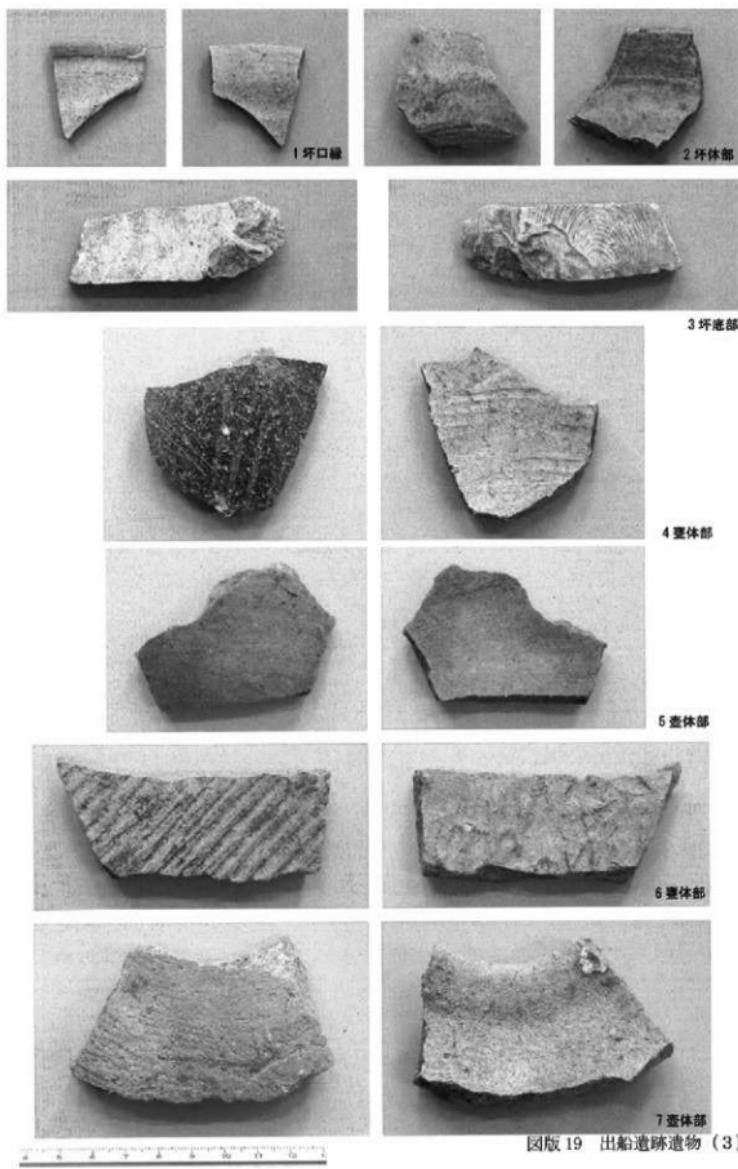


8 土師器・赤燒土器

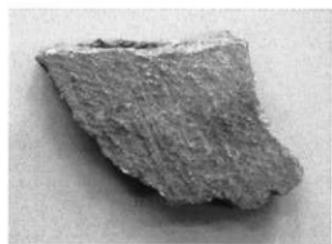
図版 18 出船遺跡遺物 (2)



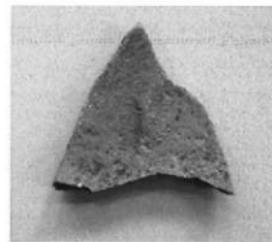
第20図 出船遺跡遺物実測図（2）



图版 19 出船遗迹遗物 (3)



1 須恵器壺体部



2 須恵器壺体部



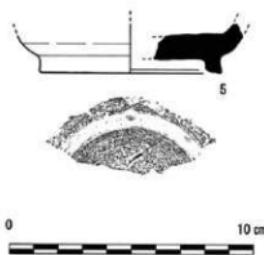
4 赤燒土器鉢底部



3 須恵器壺体部



図版 20 出船遺跡遺物 (4)



0 10 cm
(1/2)

第 21 図 出舟遺跡遺物実測図 (3)

(4) 鮑海駅推定地（飛鳥神内遺跡）

所在地 山形県酒田市飛鳥字神内

遺跡環境 飛鳥神社の南西 400 mに位置し、遺跡の南側約 500m で相沢川が最上川と合流している。標高は 10 m程度で、南側水田面との比高が約 3 mの段丘とその傾斜面に立地し、遺物は主として傾斜面の畑地から採集できる。地目は畑地及び水田である。規模は遺物の分布範囲と地形から東西 150 m、南北 100 mほどと推測できるが、今後も詳細な分布調査を行って範囲を確定する必要がある。なお、今回遺物が得られた場所は、県の遺跡地図に記載された飛鳥神内遺跡の範囲からはやや南西に外れ、より最上川岸に偏った地点となる。

採集遺物 遺物は珠洲焼や古瀬戸などの中世陶器類が主体となり、赤焼土器、須恵器などの古代のものは細片類のみである。中世陶器では、甕・壺・擂鉢などのまとまった器種があり、施文や技法から 13 ~ 15 世紀代のものと判断される。従って、今回確認できた地点は中世砂越氏に係わる「河津砂越」の舟運関連遺跡の可能性もあるが、その前段の古代の遺物も確認できることから、近くに鮑海駅家関連の船着場などの存在も推測される。

所見 鮑海駅は国府が城輪柵へ移転したことに伴って白谷駅や秋田駅と共に新設された駅家と考えられる。移転時期は弘仁 6 年 (815) から弘仁 10 年 (819) の間と捉えられることから、駅の設置もその頃か、もしくはそれ以降と推測される (中村 2003)。このように佐藤から白谷そして鮑海駅へと繋がる水上ルートの駅家配列は、出羽国府の変遷と密接な関連が窺われ、城輪柵以前の国府所在地の探索が一方での重要な課題と認識される。



飛鳥神内遺跡近景（南西～）



飛鳥神内遺跡近景（南東～）



飛鳥神内遺跡遠景（南～）



飛鳥神内遺跡の散布地近景（北東～）

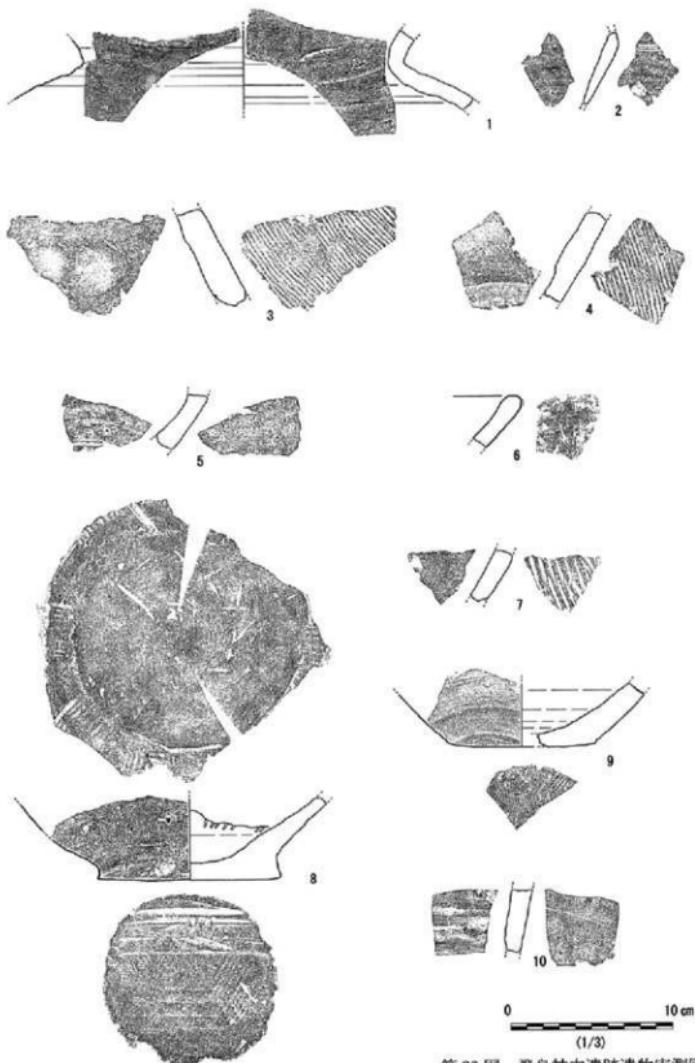
図版 20 飛鳥神内遺跡遺物



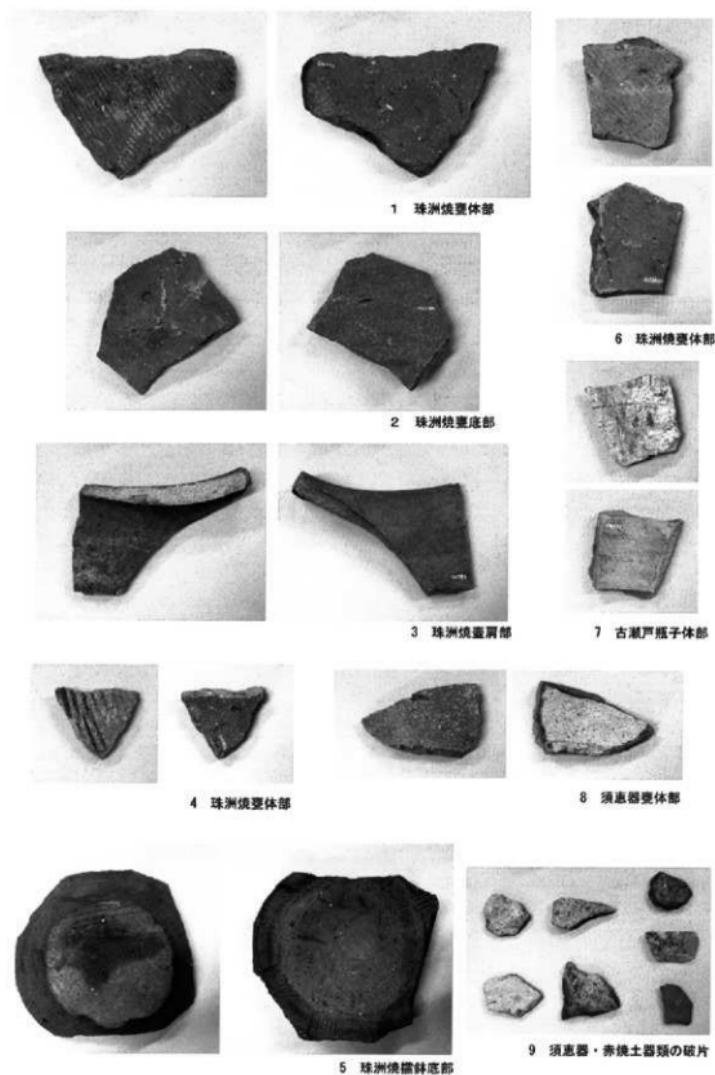
第22図 飛鳥神内遺跡位置図 (1 : 25000)



図版 21 飛鳥神内遺跡周辺航空写真



第23図 飛島神内遺跡遺物実測図



図版 23 飛鳥神内遺跡遺物

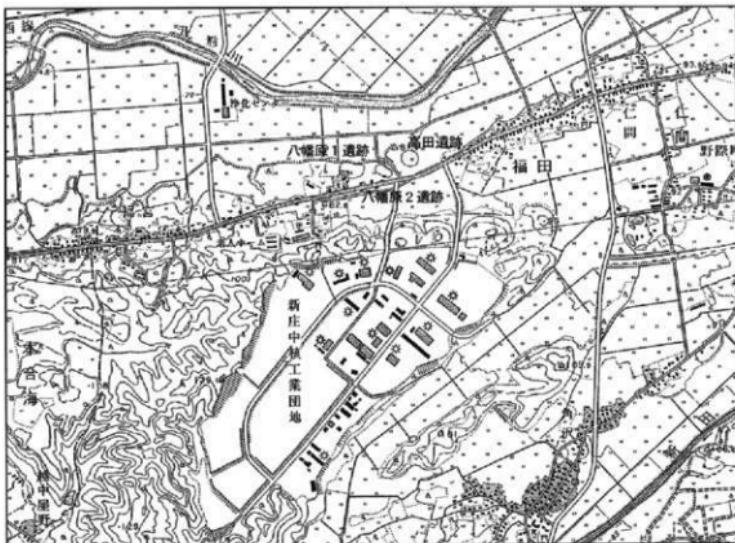
(5) 八幡原1遺跡 (平成18年度新規登録)

所在地 山形県新庄市大字福田字八幡原

遺跡環境 新庄市福田集落の北東縁、升形川左岸の段丘面に位置している。昭和40年代の圃場整備により大きく改変を受けて水田と化したが、現在は畑地として利用される。遺物は主として集落北側に拡がる段丘端部の畑地から採集でき、北西から清水端遺跡（縄文時代）、八幡原1遺跡（平安時代）、八幡原2遺跡（縄文時代）、高田遺跡（平安・縄文時代）と各々遺跡地図に登載される。この中で、まとまった遺物が得られた八幡原1遺跡は当該地区では数少ない須恵器が採集できる遺跡であり注目される。また、最上地区では唯一の須恵器窯跡で、現在その位置が特定できなくなっている八幡原窯跡の所在確認にとっても手がかりとなる遺跡として重要である。

採集遺物 30数点の須恵器を採集できたが、殆どが細片のため形状を窺い知れない。以下にこれら破片資料から選別した10点の坏・壊類の実測図を提示し概略を記す。

坏類では、無台（第25図4・5）と有台（第25図6）のものがあり、無台のものが多いと見受けられる。口縁部資料では、口唇部が直線的なもの（第25図1）とやや外反して開くタイプが識別される。いずれも器壁が4mm未満と極めて薄手の造りで、焼成良く焼き縮まったものが目に付く。底部切り離しは回転糸切り無調整が主体となり（第25図4・5）、ヘラ切りのものは皆無である。胎土では、細かな石英粒が目立つものがあるものの海綿骨針などは認められない。その他、壺の体部と判別できるもの（第25図7・10）、平行



第24図 八幡原1遺跡位置図 (1:25000)



八幡原1遺跡推定地（右側が八幡原1遺跡）（北～）



八幡原1遺跡近景（北東～）



八幡原1遺跡近景（東～）

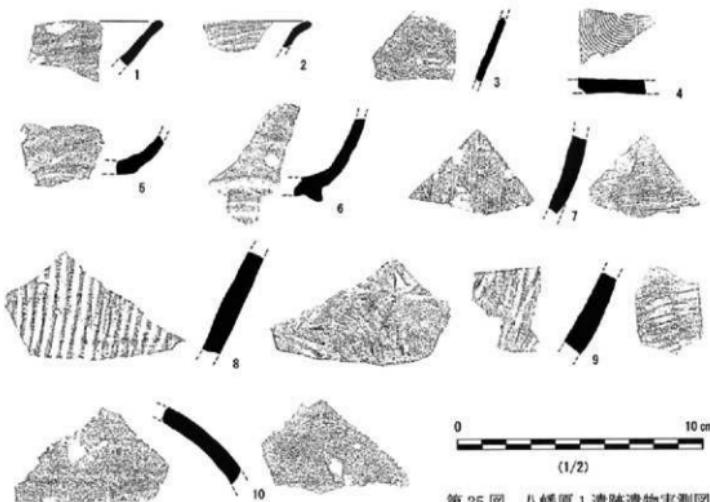


八幡原1遺跡近景（北西～）



八幡原1遺跡近景（東～）

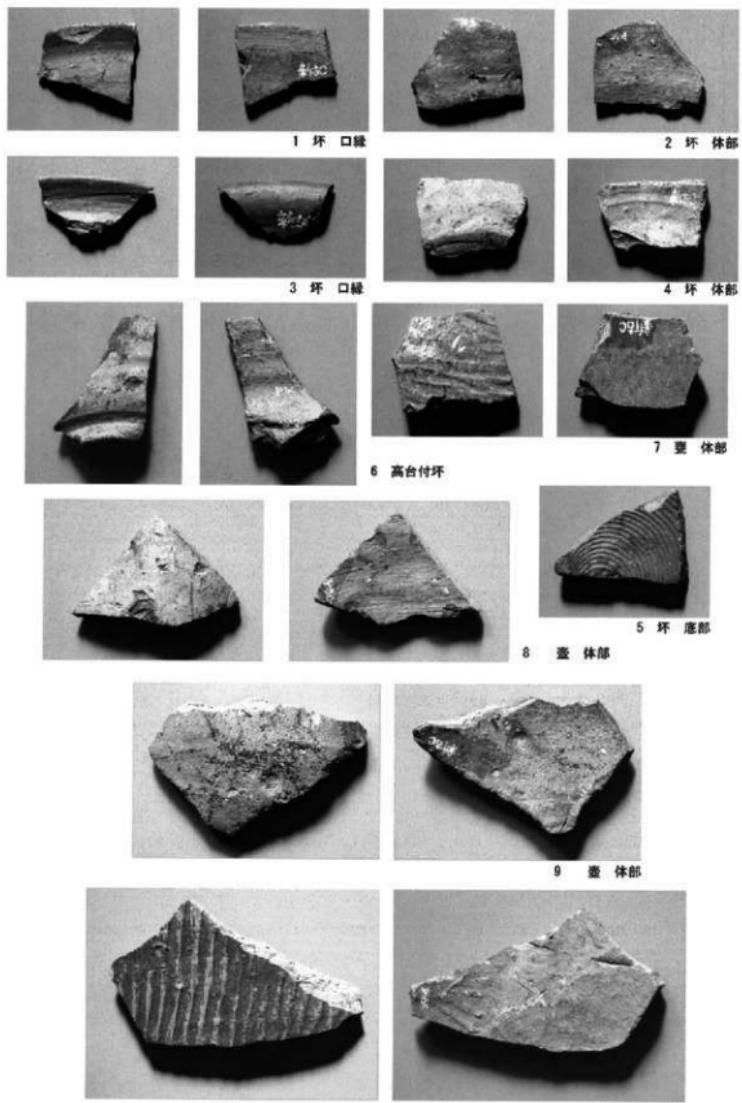
図版24 八幡原1遺跡周辺



第25図 八幡原1遺跡遺物実測図

タタキや平行アテ具痕を持つ壺体部（第25図8・9）などがある。これら須恵器の年代は、壺などの特徴から9世紀後半代のものが主体と考えられるが、高台付壺なども見られることから一部は中葉代に遡るものがあると考えてよさそうである。

所見 避翼駅から佐藝駅までの情報伝達は、駅馬の配置数から見て陸上の駅路が主であり、水路は主として伝路としての役割を担ったことが考えられる。この点では一つ手前の野後駅の場合も同様と考えてよい。それでは、水道に依らない避翼駅から佐藝駅へ至る駅路はどのようなものであったのだろうか。現在、最上郡管内の新庄市、舟形町、最上町、戸沢村、鮎川村の一市二町二村（金山町、真室川町、大蔵村には今までのところ古代の遺跡は確認されていない。）に確認できる古代遺跡は28箇所と僅少である。これらの遺跡の分布は、避翼駅に関連する舟形町大字富田周辺や佐藝駅に関連する戸沢村大字藏岡字出舟周辺、避翼駅と佐藝駅を結ぶ中継地や分歧点に当たると考えられる新庄市仁間磯ノ沢や同市福田八幡原周辺、あるいは物資運搬に関連する河岸集落を繋ぐ交通路上に沿っていたと考えられる本合海や宮野周辺などと括ることができ、当時の駅家所在地や駅路などの在り方を色濃く反映した結果と受けとめられる。以上のことから、ここで取り上げた八幡原1遺跡は避翼駅と佐藝駅を結ぶ南北方向の駅路ルートと本合海や松本・鳥越方面とを結ぶ東西方向の主要道路とが交差する要衝に位置していたと推測できる。言わばターミナル的な当時の重要な中継地としての性格が想定される。なお、最上管内では唯一の窯跡立地もうした背景があってのことと推察され、製品は近隣の駅家等に供給されたと考えられよう。



図版 25 八幡原 1 遺跡遺物実測図

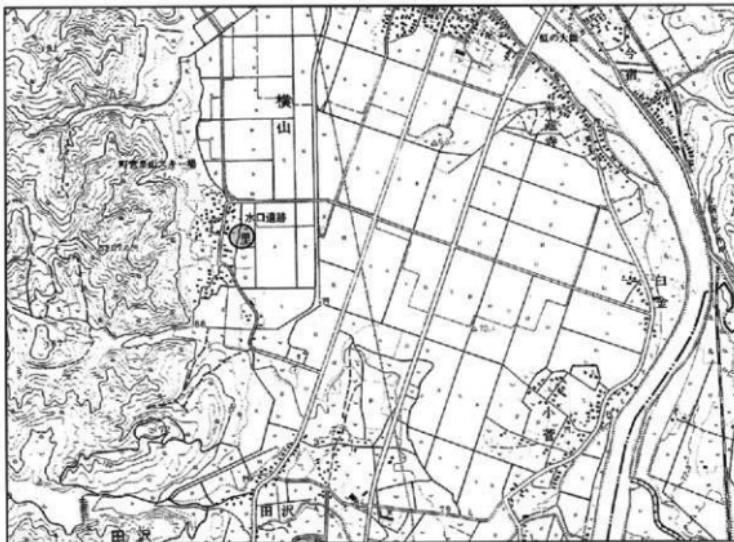
(6) 水口遺跡 (平成 17 年度新規登録)

所在地 山形県北村郡大石田町大字横山字水口

遺跡環境 里集落の東に隣接する水田中に位置する。周辺には横山遺跡、ヘグリ遺跡、白金遺跡他の平安時代遺跡の所在は知られているが、これまで発掘された例はなく、この地域での具体的な内容は分かっていない。本遺跡は平成 17 年度に文部科学省が行った活断層調査の折り、大規模なトレーニングの壁面に偶然、整穴住居の断面がかったことから発見された遺跡である。今回提示できた資料は、その断面から抜き取り採集された土器類で、出土層位は「床面直上」ないしは「住居内覆土下層」と把握された一括土器群である。また、遺物を包蔵する覆土の上位には、西暦 915 年に降灰したとされる十和田 a の火山灰層が認められ、遺物の年代推定にとっては格好的な資料と考えられる。

出土遺物 採集された土器は破片数にして 30 点ほどであり、そのうち須恵器は壺（第 27 図 13）、壺の体部（第 27 図 12）、壺口縁部細片（第 27 図 14）の 3 点に限られている。土師器は壺・鉢類（第 27 図 1～6）が中心で、概して整った刷毛目調整が特徴である。赤焼土器は器種的に長胴壺（第 27 図 7～11）に限られ、体部下半に平行タタキと平行アテ具痕、ないしはヘラ削りなどが観察される。なお、この種の壺類は庄内平野を中心として分布するタイプであることから、流通経路を含めた興味深い問題を内包していると考えられる。

遺物の年代 壺の口縁部形態や赤焼土器壺などの特徴から、遺物の年代は 9 世紀後半代の所産と推定される。またそれは、火山灰と遺物の出土層位等の関係からも補強される。



第 26 図 水口遺跡位置図 (1 : 25000)



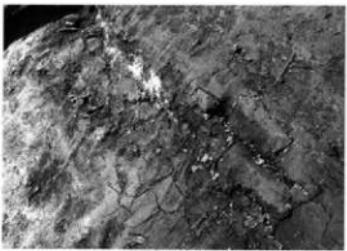
活断層調査トレンチ（西～）



トレンチ断面の堅穴住跡（南～）



堅穴住跡断面拡大（南～）

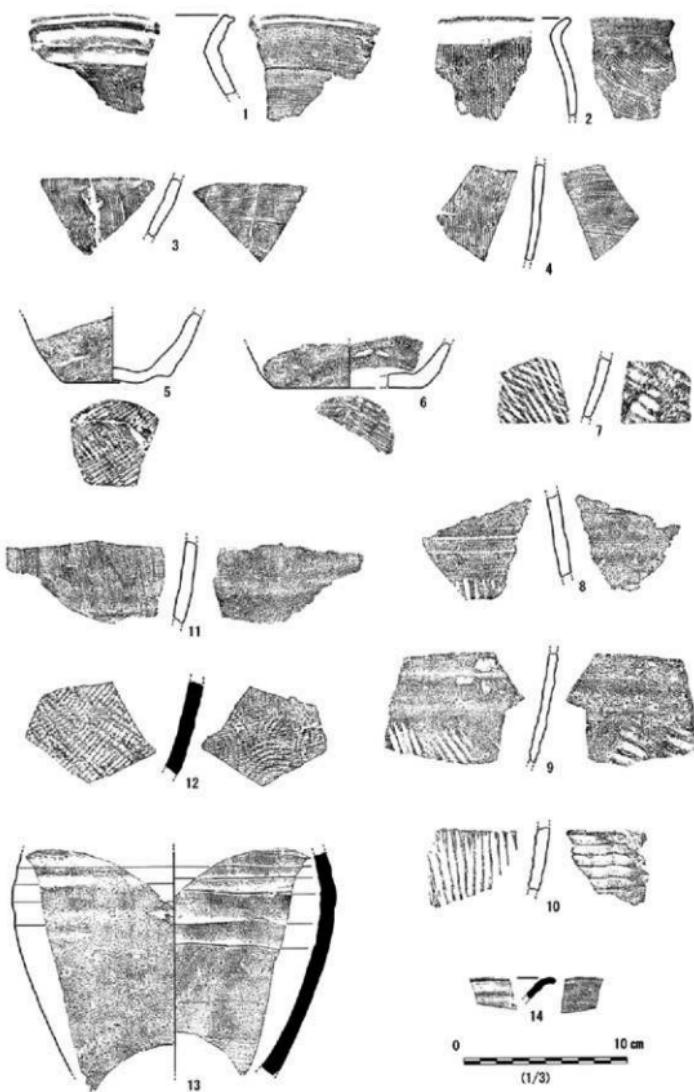


住居内埋積土中の火山灰（南東～）

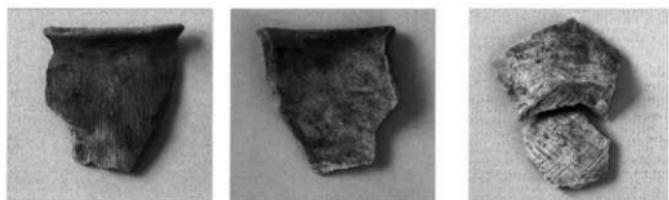


住居内埋積土中の須恵器査（南東～）

図版 26 水口遺跡調査状況



第27図 水口遺跡遺物実測図



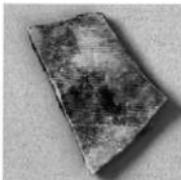
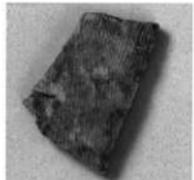
1 土師器鉢



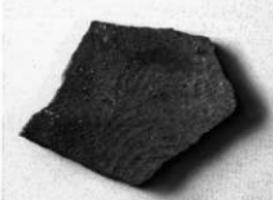
2 土師器鉢体・底部



3 土師器甕口縁部



4 土師器甕体部

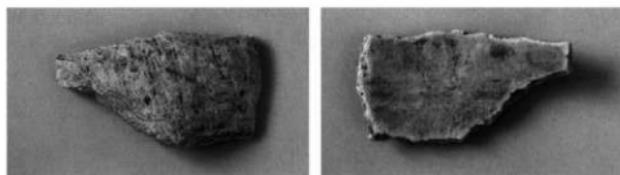


5 須恵器甕体部

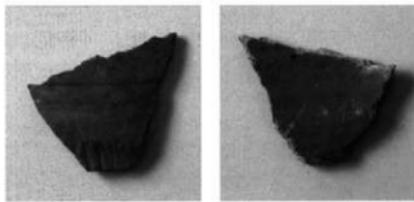


6 須恵器甕体部

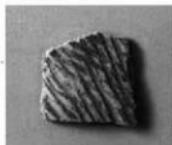
図版 27 水口遺跡出土遺物（1）



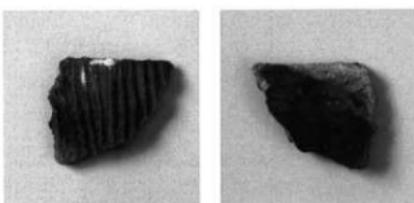
1 赤燒土器整體部



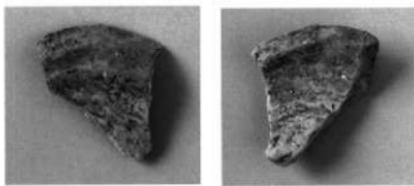
2 赤燒土器整體部



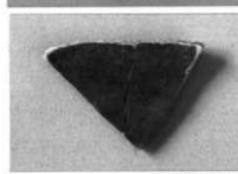
3 赤燒土器整體部



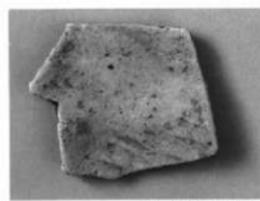
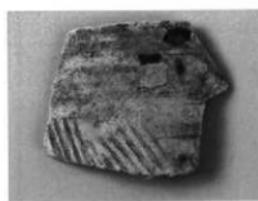
4 赤燒土器整體部



5 土師器鉢底部



6 土師器整體部



7 赤燒土器整體部



8 須恵器蓋口緣部
水口遺跡出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	もがみがわかんれんいせきかくにんちょうさほうこくしょ（いち）							
書名	最上川関連遺跡確認調査報告書（1）							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第209集							
編著者名	阿部明彦 石井浩幸 丸吉繁一							
編集機関	山形県教育委員会							
所在地	〒990-8570 山形県山形市松波二丁目8番1号 TEL 023-630-2880							
発行年月日	西暦 2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こまごめたて	やまがたけんきたむらやまぐん 山形県北村山郡	341	15	38度	140度	20070918	400	遺跡内容確認
駒 龍 橋	おおおいだまちおおあざこまごめ 大石田町大字駒籠 あざといのまえ 字土井ノ前			37分	20分	～		
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
駒 龍 橋	集落跡 宮衙跡 城館跡	縄文時代 奈良～平安時代 中世	堅穴住居跡	2	須恵器、土師器、赤焼土器、繩文土器、石器		廻付を含む掘立柱建物を複数棟検出した。建物の中にはL字型に配置されているものもある。これらの時期は8世紀後葉～9世紀後葉である。 (總出土遺物箱数：2箱)	

山形県埋蔵文化財調査報告書第209集
最上川関連遺跡確認調査報告書（1）
平成20年3月25日 印刷
平成20年3月31日 発行
発行 山形県教育委員会
印刷 株式会社ケムシー
